新津市文化財調査報告書〔Ⅰ〕

平遺跡

緊急発掘調査報告書

1982

新潟県新津市教育委員会

序

本報告書は、昭和56、57年度に新津市教育委員会が実施した、新津市大字小口部落所在の「平遺跡」緊急発掘調査記録であります。

この調査は、遺跡内の坂上敏夫氏の住宅改築にあたり宅地拡張工事の土取工事が施工されるため実施したものです。

この種の発掘調査は、当市にとって初めての調査であります。調査では縄文中期、後期の竪穴住居址の遺構、遺物が検出されました。

遠く数千年前からの先人達の跡が現在の市民生活の基盤となって今なお続いていることを考えるとき、文化財の重要性を一層強く感じます。

本調査の成果が今後の当市文化の認識に、また学術研究の一助となれば幸であります。

終りに、発掘調査のご指導と本書の執筆にあたられた、川上貞雄調査主任、遠藤孝司氏をはじめ、発掘作業にご協力下された多くの関係者に対して、こころから深く感謝申し上げる次第であります。

昭和５８年　３　月

新津市教育委員会

教育長　阿　部　清　治

例　　言

1．本書は新潟県新津市小口地区において個人の宅地拡張工事に伴って一部破壊されることになった縄文遺跡の緊急発掘調査の記録である。

2．現地調査は種々事情により3期に分けて行われた。1期は昭和56年3月23日より4月1日までの10日間、2期は追加調査をして同4月23日から5月1日間の内7日間、3期は補足調査として同9月28日から10月2日までの5日間に行われた。

整理作業は翌57年2月15日から3月27日まで行った。

3．本調査は新津市教育委員会が行い、調査関係者は次の通りである。

調査担当者　川上貞雄（日本考古学協会々員）

調　査　員　渡辺肇（文化財調査審議会委員、考古担当）高野高資（郷土史家）遠藤孝司（立正大学々生、考古学専攻）伊藤裕子

調査員補　杉本恵子

調査参加者　渡辺午郎、松田光一、松田直二、本多金吾、天野フミ、天野キイ、渡辺須美、渡辺ハル、渡辺キヨノ渡辺ハツエ、高野美佐子、松田節子、間ヒロ、羽下貴美、渡辺敏、渡辺昌美、渡辺敏弘、高野義徳伊藤治、天野浩之、小林直人、土屋正嗣、熊谷正美、鎌田護、小黒缶志、須見理、工田幸治、酒井雅晴

調査協力者　渡辺譲、渡辺久、雨野周一、坂上敏夫、渡辺重一郎、羽下貴美、落合清志、斉藤政雄、山名正平読書会、第1中学女生徒

事　務　局　阿部清治（教育長）、新津市図書館、小川三夫、沢田尚、白井規夫、石川新一郎（専従）、徳永清綱（専従）、沢田正徳、稲垣孝司、大沢滋、笠原正勝

4．出土遺物の水洗、注記作業は読書会々員の協力によって行い、その他整理作業は、川上、遠藤、伊藤が分担した。

5．本書は分担執筆し、各項の末尾に執筆者の氏名を明記し、全体を川上が監修した。

6．遺跡周辺の実測図は本多測量設計事務所に依頼して成作したものを基にして、調査員が加筆修正したものである。

7．本調査にかかれる一切の経費は市教育委員会が負担した。

8．遺物は仮収蔵台帳と共に市図書館がこれを保管するものである。

9．本調査に当り次の方々より御指導を載いた。記して謝意をのべる。

荒木繁雄、増子正三、綿田弘実、石川日出志、田中耕作、金子浩之の各氏。

目　　次

Ⅰ　序　　章

1.　発掘調査に至る経過 …… 2

2.　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 2

3.　発掘調査の経過 …… 5

4.　層　　序 …… 6

Ⅱ　遺　　構 …… 8

Ⅲ　遺　　物 …… 11

Ⅳ　ま　と　め …… 36

挿　図　目　次

1図　遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 3

2図　遺跡周辺実測図 …… 4

3図　発掘区域図 …… 5

4図　地層断面図 …… 7

5図　遺構全測図 …… 8

6図　住居址実測図 …… 9

7図　土坑実測図 …… 10

8図　住居址内出土土器 …… 12

9図　土器　1（中期）…… 14

10図　土器　2（中期）…… 15

11図　土器　3（中期）…… 16

12図　土器　4（中期　後期）…… 17

13図　土器　5（後期）…… 19

14図　土器　6（後期）…… 20

15図　土器　7（後期）…… 21

16図　土器　8（後期）…… 22

17図　土器　9（後期　蓋形）…… 23

18図　土器　10（後期　蓋形）…… 25

19図　土器　11（後期）…… 26

20図　土器　12（注口土器）…… 26

21図　土器　13（ミニチュア）…… 27

22図　土器　14（底部）…… 28

23図　土製品 …… 29

24図　石器　1（スクレイパー、石鏃）…… 31

25図　石器　2（磨製石斧）…… 32

26図　石器　3（石錘、凹石、石皿）…… 33

表　目　次

第1表　1号住居址ピット深度表 …… 9

第2表　磨製石斧計測表 …… 31

第3表　打製石斧計測表 …… 31

第4表　石錘計測表 …… 32

第5表　凹石計測表 …… 34

図　版　目　次

図版 1　遺跡近景 …… 39
図版 2　第 1 期発掘区全景 …… 40
図版 3　第 1 号住居址 …… 41
図版 4　遺物出土状況 …… 42
図版 5　1 号住居址出土遺物 …… 43
図版 6　中期の土器 …… 44
図版 7　中期の土器 …… 45
図版 8　中期・後期の土器 …… 46
図版 9　中期・後期の土器 …… 47
図版 10　後期の土器 …… 48
図版 11　後期の土器 …… 49
図版 12　後期の土器 …… 50
図版 13　後期の土器 …… 51
図版 14　後期の土器・底部 …… 52
図版 15　底部・土製品 …… 53
図版 16　石器 1 …… 54
図版 17　石器 2 …… 55
図版 18　石器 3 …… 56

I 序　　章

1 発掘調査に至るまでの経過

(1) 調査に至る経過

新津市の丘陵地は、古来場所によって土器・石器の表面採集が出来，学術研究のための発掘調査が望まれてきたが、たまたま周知の埋蔵文化財包蔵地である平遺跡地内の新津市小口1,126番地土地所有者坂上敏夫氏が昭和56年1月自宅新築のために、同地番の丘陵を削ることになったので急遽同氏から作業の延期を承諾していただき、緊急発掘調査を行うことになった。

(2) 発掘調査の経過

この調査は個人の住宅建築に係ることなので早期に着手し迅速に行なわなければならないので2月中に県文化行政課の指導を受け文化庁長官に通知し、3月23日から発掘調査を開始した。

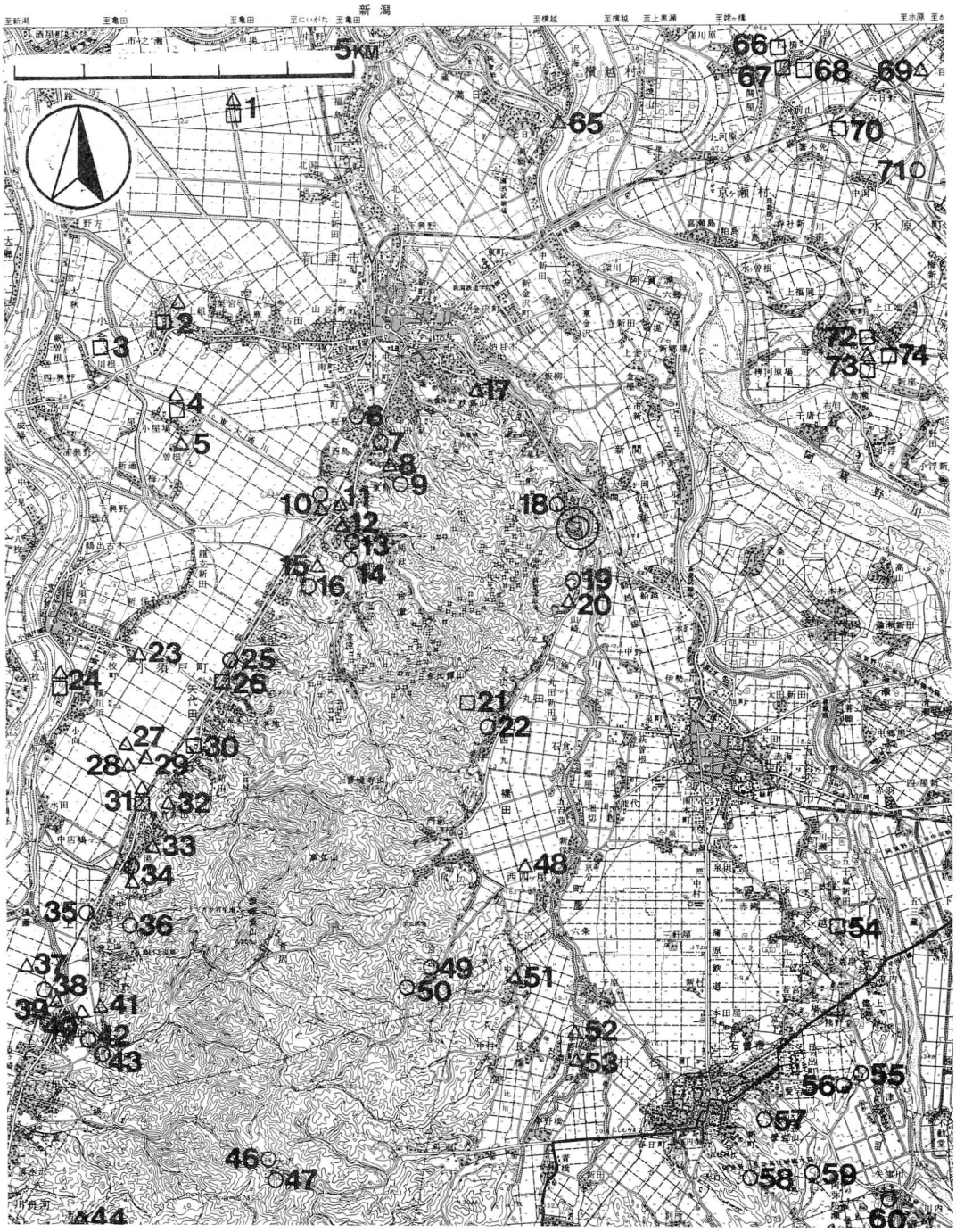
調査作業は地元民、中学生の協力によって順調に行なわれ、竪穴住居を始め多くの遺物が発掘され多大の成果を収め、4月1日をもって家屋建築の必要部分について調査を終り、次いで4月23日から5月1日まで残り部分の発掘調査を行なった。その後同年9月28日から10月2日まで、さきに調査した場所から約20メートルから30メートルを拡げ住居址の発掘調査を行なったが、土器類の破片のみで遺構の発見はできなかった。　　（徳永清綱）

2 遺跡の立地と周辺の遺跡

蒲原平野において信濃と阿賀の二大河が最も接近する地点へ向って張り出す丘陵の最北端に中世以来の城下町新津市が所在する。この丘陵の名称は定かではないが護摩堂山（268 m）を頂点とする南北に連なる山塊で南に低い鞍部を有して蒲原の名山矢筈岳、栗ケ岳、白山の峯へ続く。丘陵の西側は2～3kmの間隔を保って信濃川に添い東側には能代川、早出川、そして阿賀野川の三筋の流れに近接している。早出川の急流はその名の如くであるが、丘陵に接する能代川も今尚市街地を水魔で襲う暴れ川で、俗に九十九曲川の異名を持つこの川が、丘陵を直接浸蝕しはじめた地点に本遺跡は所在する。

新津市をはじめ、この地域一帯の遺跡数はきわめて少ない。新潟県遺跡地図（1975年県教育委員会編）によれば、新津市内の遺跡24ケ所で五泉市19、小須戸町17、白根市7、田上町27、村松町39遺跡が集録されるにとどまり、他地域に比較して、$\frac{1}{3}$乃至$\frac{1}{6}$程度の数値である。

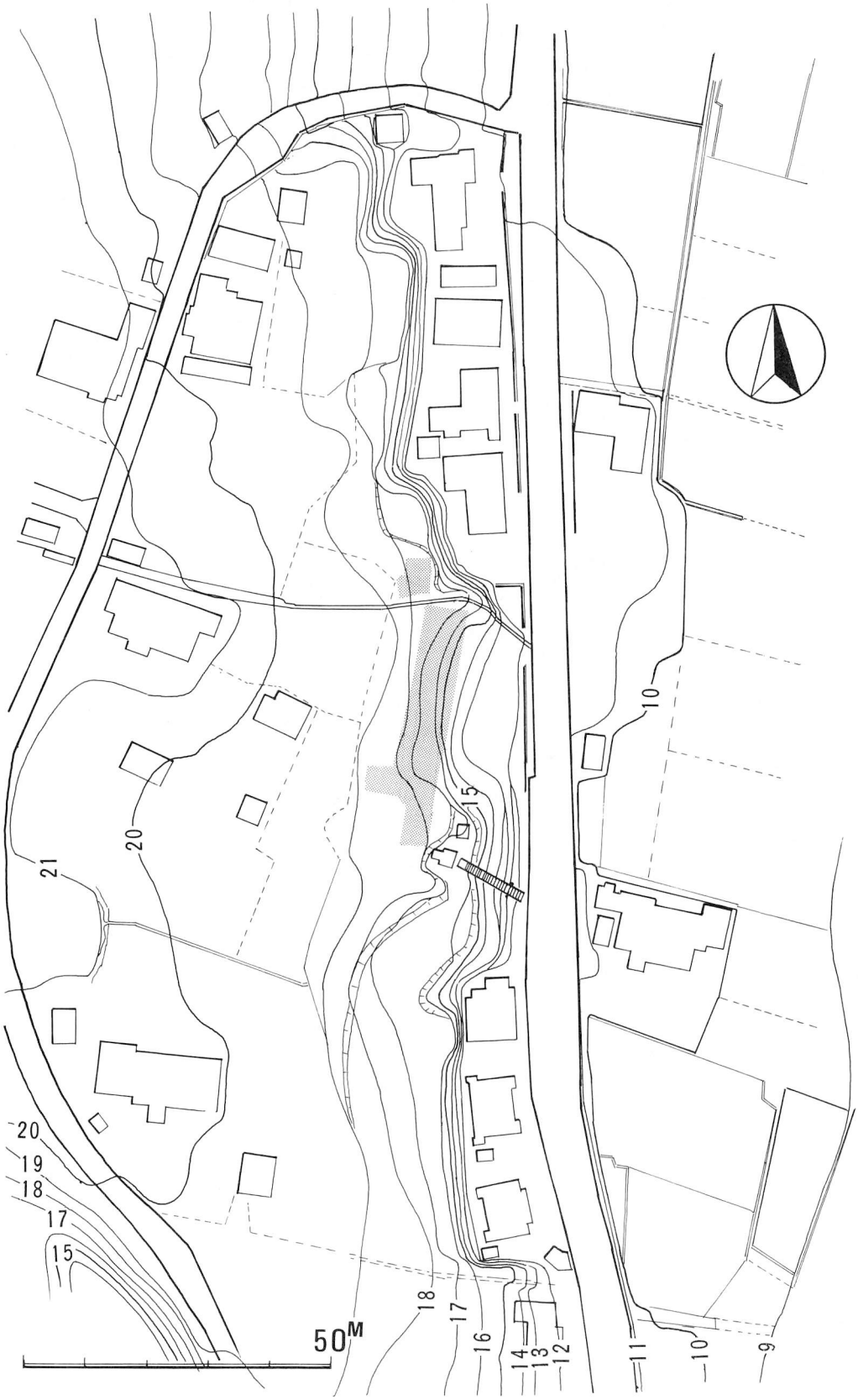
第1図は新津市及び周辺の遺跡分布図である。○印は縄文時代を主とする原始時代の遺跡、△印は古墳時代及び古代の遺跡、□印は中世の遺跡である。分布図に示した通り原始時代の遺跡は総て丘陵内に所在し、多くは丘陵先端の台地上に位置している。古代及び中世の遺跡が多い沖積地より数m乃至10数mの比高である。尚、遺跡は丘陵の西側に集中し東側には非常に少ないが、能代川や早出川を遡った村松町、五泉地域の台地上に多くの縄文遺跡が所在することなどから見て、この地域における未確認遺跡がかなり予想されるところである。



1.結　2.小戸下組　3.川 根　4.下梅ノ木　5.曽 根　6.山崎　7.原　8.大坪　9.平林　10.舟戸　11.古津駅前　12.古津　13.高矢　14.埋葬地　15.居村　16.鳥撃場　17.七本松窯跡群　18.居平　19.下野山　20.山崎窯跡　21.堤　22.赤坂　23.東腰付　24.横川浜堤外地　25.三沢原　26.九ツ塚　27.丑ケ島　28.大沢谷内　29.丸山　30.五本田館　31.三ケ屋敷　32.六兵衛沢窯跡　33.長福寺　34.五社神社　35.向屋敷　36.中店　37.長沢　38.古屋敷　39.下屋敷　40.中轎　41.諏訪の前　42.塚野　43.川の下　44.茗ケ谷　45.川船河　46.大沢峠　47.大沢　48.住吉田　49.八幡平　50.宮古　51.中名沢　52.笹野町A　53.笹野町B　54.門後　55.矢津　56.旭山　57.愛宕山　58.深沢　59.中番坂　60.矢津川　61.牧　62.寺田A　63.寺田B　64.安出　65.寺　嶋　66.紺　屋　67.下の橋館　68.藤の木　69.三辺稲荷　70.土島館　71.石船戸　72.庚　塚　73.分田館　74.瘤榎

○原始時代　△古代　□中世の遺跡

第1図　遺跡と周辺の遺跡分布図



第２図　遺跡周辺実測図

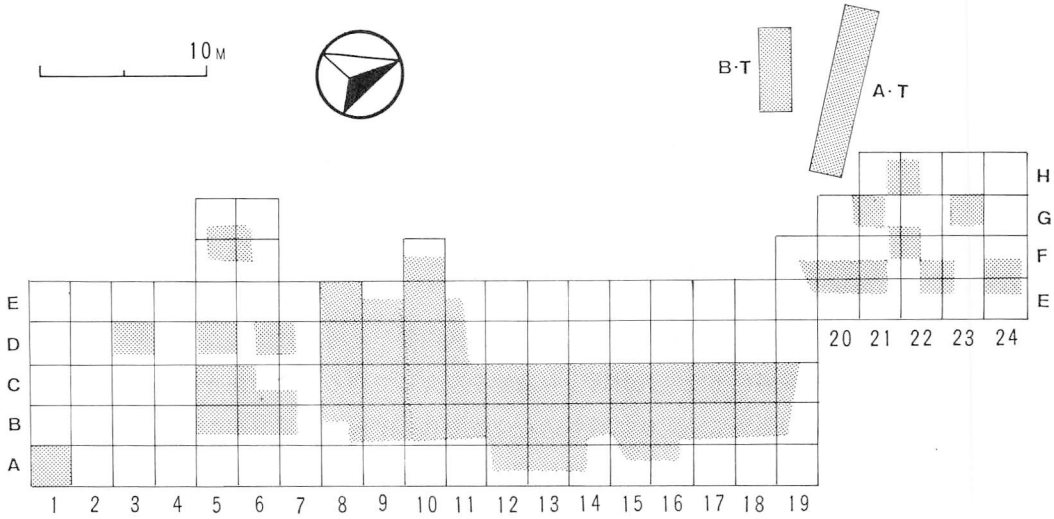
遺跡のある小口部落は丘陵先端の台地上の緩斜面にあり、家並から見てやゝ新しく進展したと思われる南半の一角に遺跡はある。急な石段上にある間神社の背後から右手に広がると考えられる遺跡は、その範囲を確認することは出来なかったが、東西40m、南北約70m程と推定された。この立地は平均 8°の東向きの斜面が続き端部はやゝ急勾配となり25°を計り、末端部は35°の急斜面となる。この末端部分は山足に営む建造物によって殆んどが切り崩され断崖となっている。第2図に示した如く約7m下の丘陵の麓には県道新関、橋田、村松線が走り東前方70mに能代川が北に向って流れている。背後の山峰は標高104mで、現在では幾筋もの鞍部に道を有し、約4kmで西側沖積地帯へ出ることが出来る。

越後の雪は遮ることは出来ないが、山陰に位置するこの辺りは西側より幾分多量の積雪を見ようが、肌を刺す北風を受けることはなくむしろ凌ぎやすい天地かに思える。

遺跡の現状は宅地、畑、山林である。

3 発掘調査の経過

発掘調査はごく小規模なものであるが、3期に渡り調査区域も2区におよんだ。基本的な調査範囲は宅地拡張のために消滅することとなった地域であり、その位置は第3図に示したグリットのA～C列の9～19区である。この位置は遺跡の最東端に当りやゝ傾斜度を増した地形であり、さらに後世における鍬入れ（造林或るいは畑作等のために斜面を段状に切る）が見られ、程2m幅の2段階の段切りがなされている地帯である。その先端は昔時の宅造によって切り取られている。この第1期調査の範囲は約150㎡であった。



第3図 発掘区域図

調査は傾斜地であることと樹令数十年を経たと思える直径50～60㎝の杉の切株が点在することや且つその樹根周辺に多量の土器片が集中していたこと等で困難を究めた。調査の結果は保存度の良好な住居址の一部分と、ほゞ住居址と考えられるものの一部分をそれぞれ検出し、多量の遺物を採集して終了した。

第２期調査は宅造者がとりあえず残存することとなった良好な住居址の未発掘分を完掘するためと南側の樹間地点での確認調査のために行なわれた。

この位置は第３図に示したグリットのＤ・Ｅ列の９～11区の全区と、Ａ～Ｇ列の１～８区内を遺物や遺構の出土状況を見ながら部分的に発掘調査した。これらの調査面積は63㎡弱であり、この結果は次章で報告する住居址を完掘し、住居址周辺より多量の土器片を検出した。然しながら５列以南には遺構、遺物共皆無に等しかった。尚８～11列における出土遺物の主たるものは出土地点と層位を記録したが、整理作業の結果では３層間にわたる出土遺物がいずれも後期の同一時期に属するものであることが確認され、数点の中期に属する土器片もこれらと層位的に区分出来るものではないことが分った。

以上の一連の発掘調査の結果、地元有識者において遺跡保存運動が起き、ここに完掘した住居址の移転復元保存等の動きとなり、合せてより多くの調査を望むこととなり隣接する原野化している空畑地内で確認調査を施すこととなった。これが第３期調査である。

この調査範囲は第３図に示した所のＥ～Ｈの20～24区及びＡ・Ｔ、Ｂ・Ｔ内を任意に坪掘状に調査した。この地域は東側、北側と大きく切り取られて断崖となり地表面はやゝ平坦であるため、遺構検出の期待が大きかったが、Ｅ・Ｆの21、22区に単発的な小ピットを検出したに過ぎなかったし、遺物もＧ－21区辺に集中していたがこの地区は数本の果樹があり拡張調査を控える結果に終った。

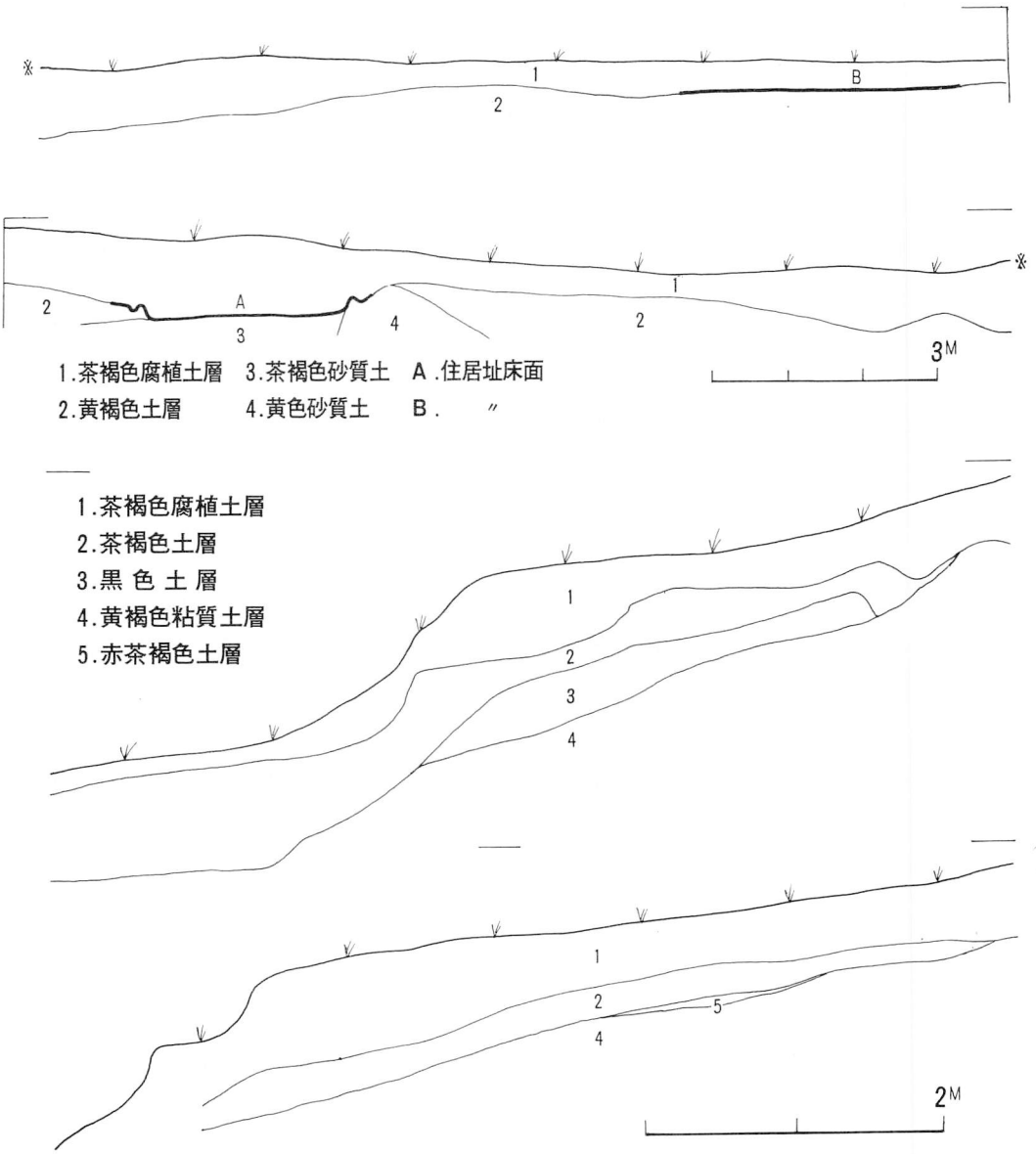
尚、図示したごとく１～19列のグリットは2.5ｍであるし、他は２ｍグリットである。Ａ・ＴＢ・Ｔ共２ｍ幅である。

4 層　　序

発掘地域の地層は位置的にやゝ異なりを見るが、基本的には表土、遺物包含層、遺構検出層、及び数ｍ以上の礫層である。

第４図に示したものの内Ａ～Ａ′はＣ－９区～Ｃ－19区西側の地層で昔時の表土は失われたものと考えられ、第１層は茶褐色土で地表付近より遺物を包含している。中央部分（北側より13ｍ地点）が最も厚いのはこの部分に小沢状に落ち込む位置でＢ～Ｂ′セクションがこの地点即ち13、14列間を西東に記録したものであり土の流入が見られる。Ｃ～Ｃ′セクションは７、８列間のもので、図示しないが19列北面のものと同様に単純である。

前述のＡ～Ａ′セクションにおける太線は２基の住居址の床面であり、南側１号住居址の右に見られる地層は黄褐色砂質土層で住居造営のために搬入されたものと考えられる。（川上貞雄）



第４図　地層断面図

上、Ｃ、Ｄグリット間
中、13、14グリット間
下、７、８グリット間

Ⅱ 遺　　構

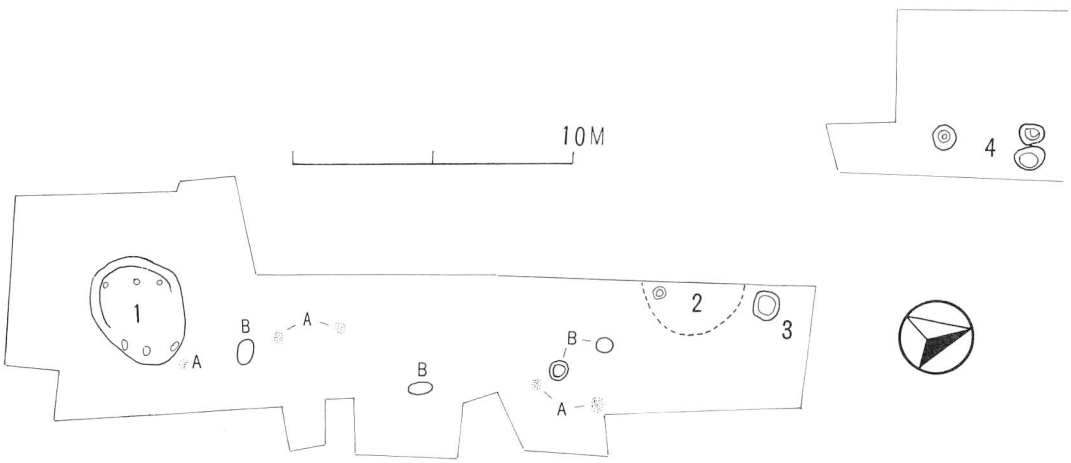
遺跡の末端におけるごく小規模な発掘調査であったが、次に報告する所の住居址２、土坑、ピット群、その他数基の土拡（時代不明）等を検出した。

住 居 址

遺構としての住居址は２基を確認した。この内１基は完掘し、他の１基は発掘予定区域内の$\frac{1}{3}$弱を発掘したにとどまり、傾斜地下方部分のため壁の検出は見られず、又炉址等の遺構も見られなかったが住居址と看做したものである。前者（後述の１号住居址）は縄文後期前葉に位置し、後者（同２号住居址）は縄文中期前葉に位置するものである。

第１号住居址（第６図、図版３）

Ｃ・Ｄ９、10区に所在する。この地域は東下りの平均程16°という傾斜地であり、住居址を営むにはやゝ急勾配である。依って当然のことであるが、山側（西方）を段状に60㎝も深く堀り込んで床面を造築し、反面谷側は周辺の土砂の流出も考えられないでもないが、むしろ床面が浮き上っている如である。さらに最も谷側に位置する柱穴の30㎝前面はさらに勾配を32°と増して崖下に落ち込んでいる。床面における法量は3.6 ｍ×4.2 ｍ（南北×東西）と程円形プランを成し、山側壁面の外部（上部）には内法20～25㎝幅、深さ30～35㎝程の溝が構築され、周囲の地形上必然的なことであるが遺構を程半周しており、当然溝も急勾配を有している。床面には都合33個の大小のピットが検出された。この内やゝ大きいものに番号を記したが、それらの間に小穴が並んでいる。これらピットの深度は表示したところであるが、その深度と、平面図にても明白な如くP1. P2. P5. P7. P9. P13の６個が当住居を支えた主要柱穴と考えられる。さらにP1. P2 間に小穴が無いことや、その外部が地形的に開放的なことからこの位置に出入口が設けられたと推定される。南側の床面と溝との間の壁面にテラス状の段が設けられている。法量は奥行35㎝、幅



第５図　遺構全測図

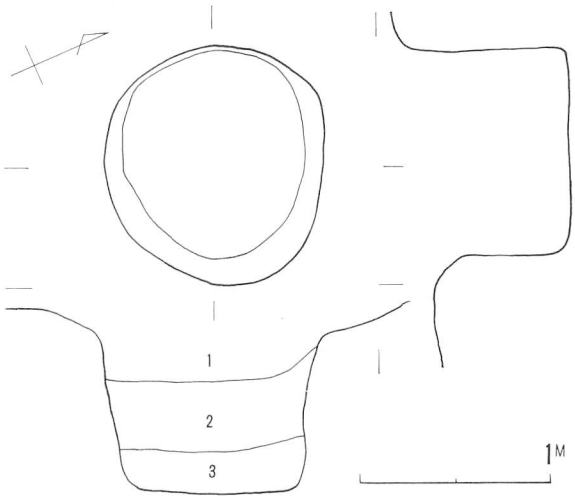
第6図 住居址実測図

P 1	27	P 4	21	P 7	36	P 10	16	P 13	39	P 16	13
P 2	40	P 5	14	P 8	18	P 11	5	P 14	28	P 17	12
P 3	16	P 6	14	P 9	33	P 12	17	P 15	12	P 18	16
その他の小形ピットの深度は4～12㎝である。											

第1表 第1号住居址ピット深度表（㎝）

220 ㎝である。

炉址は2ケ所にありいずれも床面に直接火を焚いたもので、配石等の施設は見られない。その内の一つは数㎝の堀込みが見られ、長径1㎡の隋円で焼土の上に2㎝程の灰の堆積が見られた。他の一つは床面と水平の焼土のみであり長径40㎝程のものであった。



第7図　土坑実測図

第2号住居址（第5図参照）

C－17、18区に検出されたものでおそらくD・Eの同区に広がる遺構と考えられる。この地区は1号住居址よりやゝ緩い11°の東向き傾斜地である。検出できたものは平坦で且つ固く踏み固められた盤状の面で、住居址床面の程$\frac{1}{3}$と考えられるものである。検出面での最大径は4.95㎡で南寄りに口径50㎝程のピットが1個見られる。竪穴の壁等の検出は見ないが、1号住居址の谷側に見られるものと同様な形態におけるものと考えられる。床面より3固体分の土器片が出土した。いずれも縄文中期に属するものである。

土　坑（第7図）

C－19区の調査区域末端に接して検出された土坑で、口径は東130㎝ 南北120㎝で北側にテラス状の張出し部分を有し、坑壁は程垂直に掘られ、深土は80㎝である。土坑内を埋めた地層は3層に別れ、上部の第1層は黒色土で多量の土器が見られた（図版4－$_1$参照）。第2層は黒色砂質土、第3層は黒褐色砂質土で特に硬く締付けられているかに思えた。出土土器は無文のものが主であるが、胎土等の検視より縄文中期のものが主と考えられる。本遺構は前述2号住居址の北側に接するかに思えるが、2号住居址の輪郭が不破定であること等から見て或るいは同住居址に接して位置することも考えられるが、いずれにせよその性格は貯蔵穴と考えられるものである。

ピット

改めて図示しなかったが、E・F－21、22区及びA・T西端部等において数個のピットが検出された。直径35～45㎝、基盤地層における深さは25～55㎝で、中には肩部に数個の根抑状の礫が並ぶもの等があり、柱穴と推定されるものである。現在その地形及び地上の条件によって住居址に結びつくより積極的な配例やその他の遺構を検出出来なかった。

灰　塊（第5図 記号A）

B－10、C－11～12、B－15～16区に灰の堆積が見られた。これらは程50～80㎝の範囲内に及ぶものである。遺跡との関連は不明である。　（川上貞雄）

Ⅲ 遺　　物

本調査で検出された遺物は、縄文式土器、土製品、石器、石製品等である。土器は破片数にして約2万1千点を数える。今回の調査区域は、丘陵末端部の傾斜地であり、地層累重の信憑性も弱く、土器を層位的に分類することができず、完形となる土器も検出されなかったので、文様と器形により分類を行なった。尚、今までに報告されている遺物と様相を異にする遺物も検出され、厳密な意味での分類は行なえなかった。

1．土　器

第1号住居址出土の土器　　（第8図 図版5）

第1号住居址床面、及び住居址に供う周溝より検出された土器で、特徴的なものを抜出した。1～6は、いわゆる縁帯文系の土器で、いずれもゆるやかな波状口縁を呈すものである。砂粒を多量に含み、焼成はやや不良なものが多い。7は頸部から口縁にかけてやや外反する精製土器片で、きわめて良く研磨され、堅緻な感じを受ける。横位に連続刺突文をめぐらし、口縁部と胴部文様帯を区画し、胴部には棒状工具による刺突文が全面に施文されている。黒色を呈す。8～10は、櫛歯状工具を用いて条線文を描いたもので、砂粒を多く含み、茶褐色を呈している。12、13は、おそらく同一個体であろう。器全面にヘラ状工具等による同心円状の太い沈線が施されている。砂粒を多量に含むもので、クリーム色を呈している。器形、文様とも類を求め難い。14は頸部に隆帯をめぐらし、口縁部無文帯と胴部文様帯を区画している。

第1類　（第9図1～9、図版6－1～11）

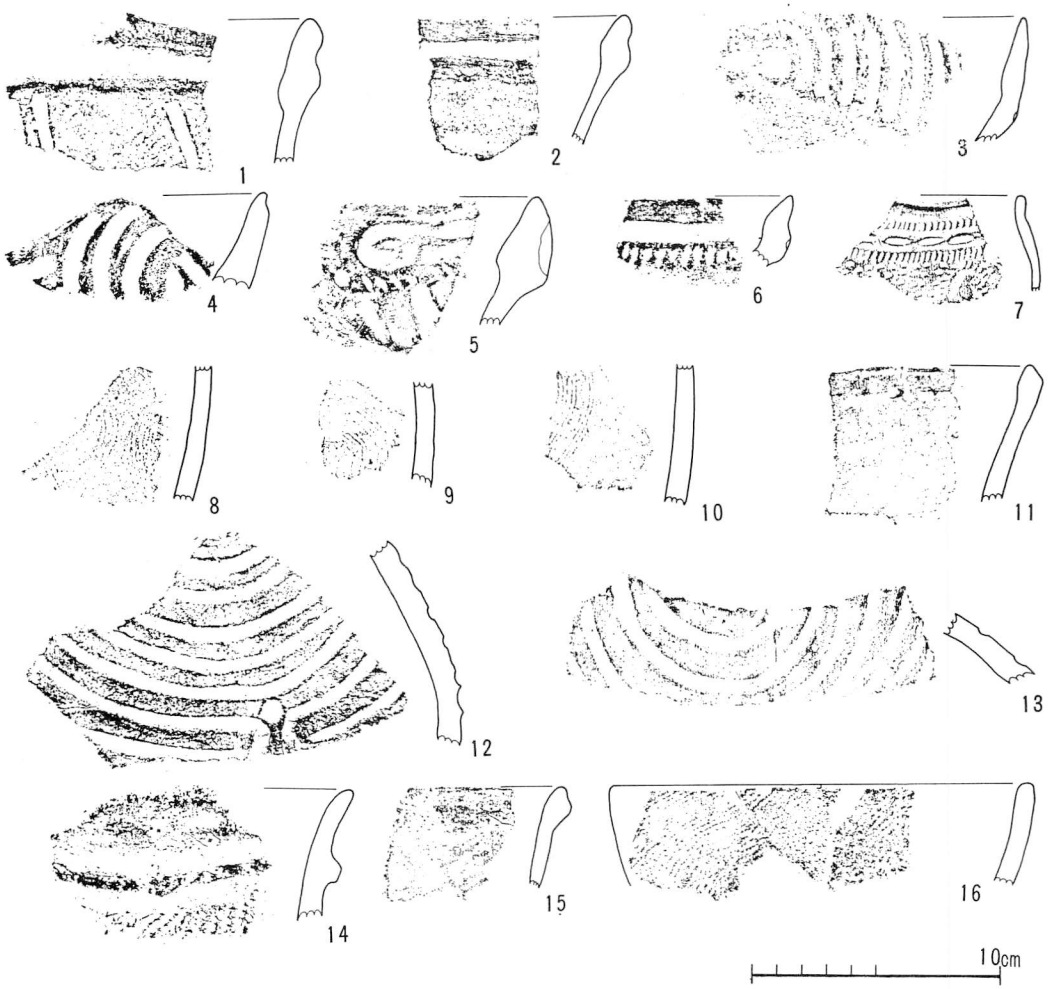
爪形文を持つ一群である。いずれも横走する半隆起線に爪形文が施文され、口頸部付近の文様帯を構成しているものである。本類の施文手法をみると竹管を45°前後の角度で押引したものが多い。1～5、9は右開きとなる、いわゆるC字状の爪形文で、6～8は、いわゆる逆C字状の爪形文である。6は口縁の内側に山形の張らみを有し、その頂部に一条の横位の半隆起線をめぐらしたものである。8は、半隆起線の押引や爪形の施文が弱く行なわれたようで、平坦な感じを受け、また他の爪形文と比較しても胎土、焼成ともにやや劣る。

第2類　（第9図12・15・17　図版6－14・17・19）

斜格子目を持つものを一括した。本類は沈線により斜格子目文が作出されているもので、細隆起線による斜格子目ではない。15の平行沈線上には、コブ状の突起を付している。いずれも焼成はやや不良で、茶褐色を呈す。本類は第1類と同様、県内中期前半の遺跡において普遍的に検出されるものであろう。

第3類　（第9図10・11・13・14・16　図版6－12・13・15・16・18）

格子目文を一括した。本類は胴部、口縁部付近の文様帯を構成しているもので、いずれも半隆起線区画内に沈線による格子目文が施されているものである。縦線を先に引き、次に横線を引いているものに10・14・16、横線を先に引いているものに11・13がある。本類は胎土、焼成とも良好で、茶褐色を呈しているものが多い。



8図　住居址内出土土器

第 4 類　（第10図 1 ～ 8 ・18～21　図版 6 －20～24・30～36）

口頸・胴部付近に半裁竹管による半隆起線文が施されるものを本類とした。ほとんどが縄文を地紋とするものである。1は横位に半隆起線がめぐり、その下方は縄文が施され、逆U字状の竹管文が描かれている。また、半隆起線から下方に逆T字状に粘土紐の貼り付けが行なわれ、その上に竹管の内側による縁どりが行なわれている。6は地紋に縄文が施され、縦位の竹管による沈線が描かれ、その内の数条が、意識的に強く押引されている。また、菱形状の文様も施文されている。7・8は胎土、焼成、文様から同一個体であろう。縄文が施され、横位の沈線がめぐり、その上部に逆Y字状の竹管文が並列に施されている。18～21は底部の破片であるが、文様構成から本類に含めておいた。

第 5 類　（第10図 9 ～17　図版 6 －25～28　図版 7 － 1 ～12）

口縁部付近に、口縁と平行な半隆起線や沈線が数条めぐり、その間に竹管かヘラ状工具により縦位の短い条線や線刻を持つ一群である。本類の縦位の条線に三角形沈刻を加えれば、いわゆる

第6類の蓮華文となり得るものである。14・16・17は、その代表的なものであろう。12・13・15は、縦位の条線が比較的太く、間隔も密でなく、蓮華文にみられる条線とはやや様相を異にするものである。12・13は胎土、焼成、文様構成等同じで、同一個体であろう。14の半隆起線区画内の格子目文は、先に縦位に半隆起線が、次に横位に棒状工具のようなもので線刻され、格子目文が作出されている。15も14と同様であるが、格子目文ではなく、斜格子目文である。15は半隆起線文による斜格子目文でなく、ヘラ状工具により、先に右傾、次に左傾として作り出されている。左傾の沈線が正確なものでなく、斜格子目文と云えないかもしれない。その大方には、平行の半隆起線がめぐり、その間に、並列にコブ状の突起が付されている。これは、半裁竹管の内側で器面の粘土を引き集めて作り出されたものと思われる。17は波状口縁で、突起部の直下には渦巻状の線刻が施され、その左右に三角形沈刻が加えられている。その下に貼り付けが施され、指頭によるものであろうか、種子状の文様が加飾されている。

第 6 類　（第11図　図版7－13～28　図版8－1・2）

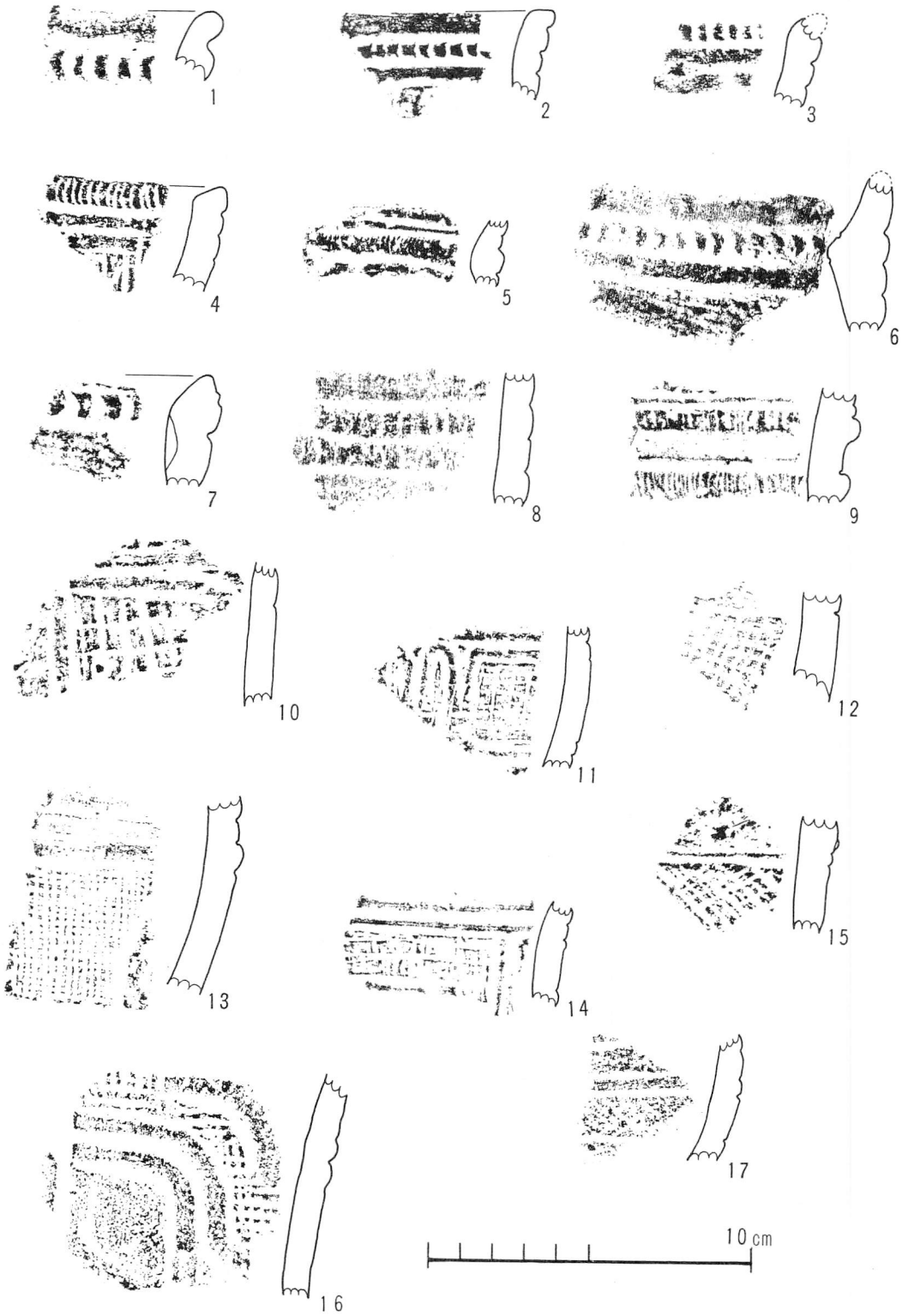
いわゆる広義の蓮華文を一括した。本類は、口縁に平行な半隆起線が数条めぐり、その間に縦位の短い沈線が密に施され、三角状沈刻が行なわれて生じた文様である。1は口縁部上方と頸部の二段に、縦位の細かい沈線が施され、上段には三角状沈刻が加えられ、蓮華文となっている。下段にも三角状沈刻が加えられた場合、即、蓮華文となる。縦の短い沈線に、横位に一条の沈線を走らせ、縦の沈線を2分させ、下方に三角状沈刻を行ない蓮華文を作出しているものに2・4・13・14がある。10は上下交互に三角状沈刻が行なわれ、鋸歯状文を呈している。11は他の蓮華文と様相を異にするものである。三角状沈刻を行なう前に、竹管によるU字状の施文が行なわれ、下方から沈刻を行ない、蓮華文が表現されている。16は特異な土器で、県内の報告で近似するものをみい出せなかった。波状口縁を呈し、突起部直下に縦位の粘土紐を貼り付け、その最下部に横位の貼り付けが行なわれている。突起部の両裾部には、2個1組のコブ状突起が付してある。口唇部には刻目がめぐり、下方に沈線が施され、以下3段からなる棒状工具による刺突文が施文されている。蓮華文も表現されている。この土器はキャリパー状の形状を呈し、口頸部は無文帯となる。口縁部文様帯は、円形刺突文と蓮華文が交互に2段ずつ施文されているが、これらの規則性は弱く、U字状の文様帯を境にして、若干異なってくる。胎土、焼成とも、きわめて良好で茶褐色を呈する。

第 7 類　（第12図1～3　図版8－3～5）

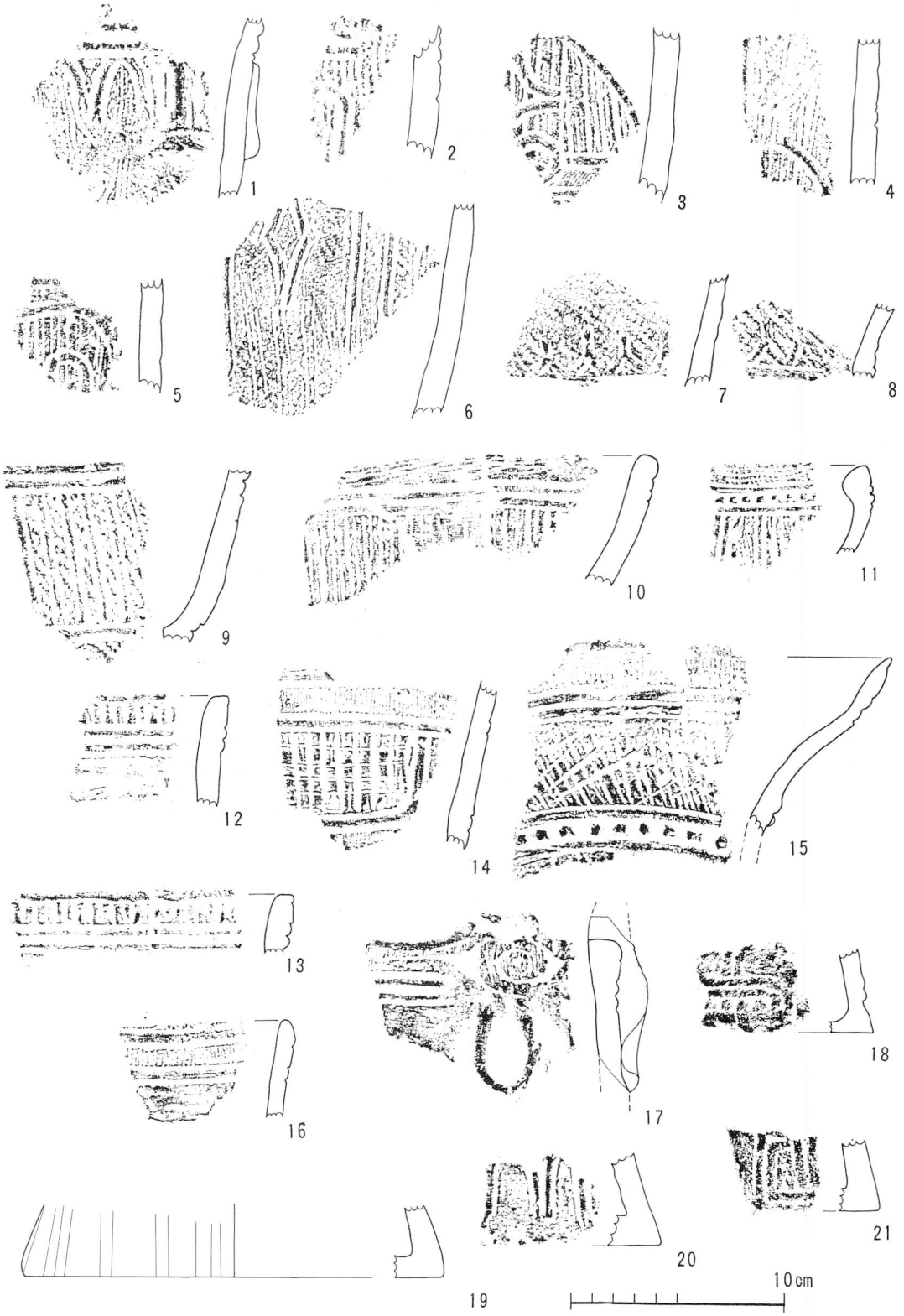
口縁部付近に粘土紐の貼り付けが行なわれ、竹管により加飾されたもので、金雲母を多量に含むものである。本類は、いずれも第2号住居址より検出された。焼成は、やや不良で、大変もろい感じを受ける。他の土器片と明確に識別できるものである。

第 8 類　（第12図5・6・8～11　図版8－6・8～12）

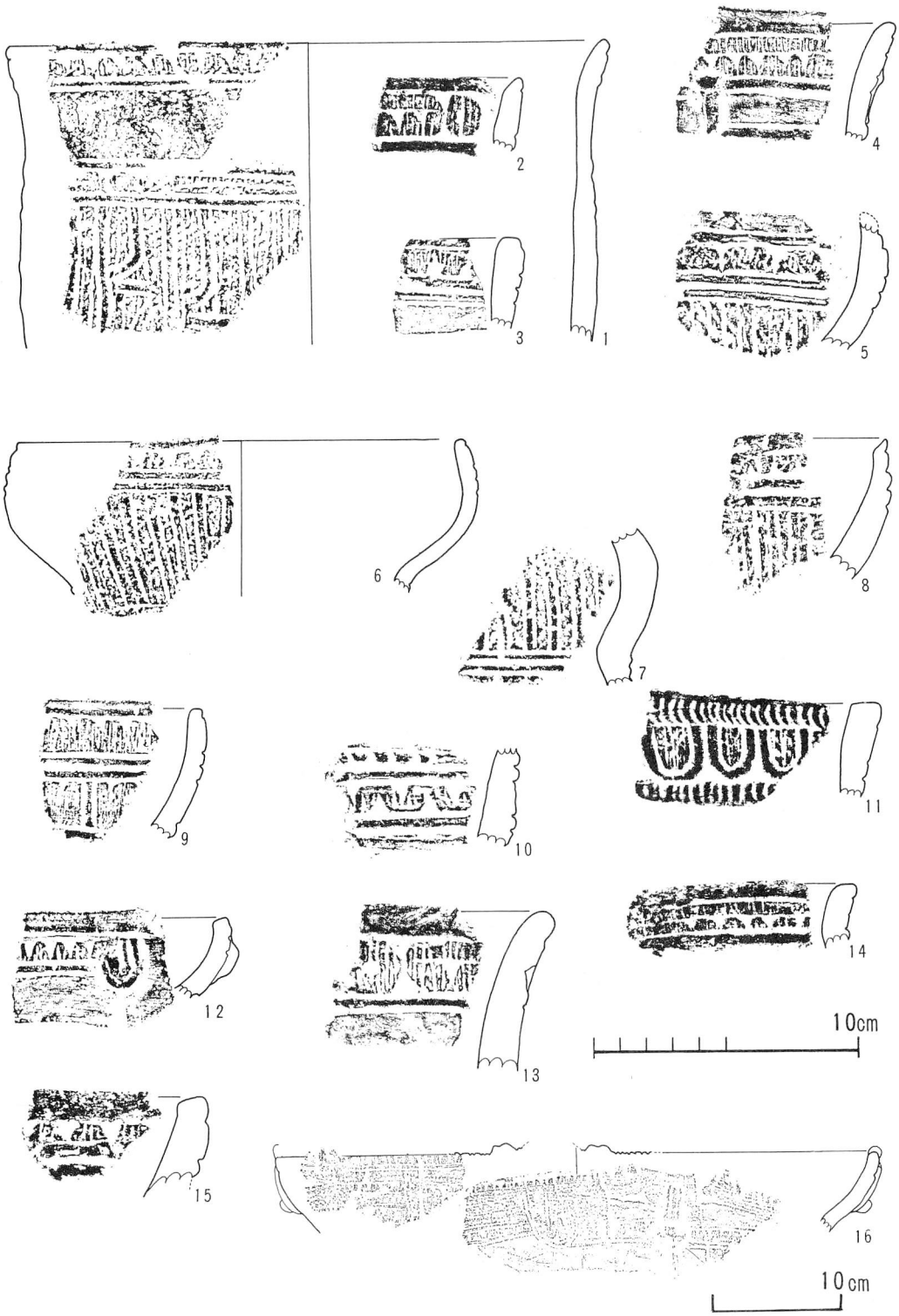
撚紐、絡条体の側面圧痕を持つ一群である。6は波状口縁を呈し、撚紐が横位に4本押捺されている。8・11は、地紋として縄文が施されている。10・11には、コブ状の貼り付けがみられる。本類は、いずれも口縁部付近で文様帯を構成し、口縁は直立か、若干外反するものがほとんどである。



第9図　土　器 (1)



第10図　土　器（2）



第11図　土　器（3）

第12図　土　器（4）

第 9 類　（第12図16～18　図版 8 －20～24）

木目状結束撚糸文を持つものである。1は撚糸文で、器面には指頭によるゆるやかな凹みがみられる。2・3は、木目状結束撚糸文上に横位の半隆起線が2本施されている。図版第8図18は波状口縁を呈し、20・21と同一個体であろう。いずれも胎土、焼成とも良好である。

第 10 類　（第12図19～22　図版 9 －16～24）

器全面に縄文が施されたもの、無文のものを本類とした。19の口縁は直立するもので、20・21はやや外反する。22の口縁部は無文帯で、頸部から口縁にかけ外反する。焼成は普通で、雲母をかなり含むものである。図版第9図23・24は、無文の土器であるが、焼成良好で、よく磨かれ、堅緻な感じを受ける。

第 11 類　（第13図 1 ～20　第14図 1 ～ 5　図版10　図版11－ 7 ～10）

ほぼ直立するものと、内傾する口縁のもので、いわゆる縁帯文系と云われるものを本類とした。口縁部文様により数種に区分される。

a　（第13図 1 ～ 5　図版10－ 1 ～ 5 ）

口縁はゆるやかな波状を呈し、波状の頂部には太目の沈線による同心円状の文様が施されているものである。頸部には幅の広い凹んだ無文帯がめぐっている。1・4の胴部には縄文が施されている。茶褐色を呈し、焼成良好である。

b　（第13図 6 ～13・18～20　図版10－ 6 ～18）

口縁部文様帯と胴部文様帯を、やや幅のある沈線により区画したもので、口縁部に刻目が施されているものである。9は口縁から胴部にかけて、縦位の隆帯が施され、隆帯上に棒状工具による円形の刺突文が加えられている。赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。20は口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している沈線の代りに、刻みが施されているもので、刻みが段となる。

c　（第13図14～17　図版10－19～26）

内傾気味の口縁部に、指頭圧痕などによる凹みを有する一群の土器である。指頭による円形の押圧後、上部に引き上げているものに14～16がある。圧痕の手法から、施文者は左利きと思われる。図版第10図25・26は同一個体であり、規則的な円形の押圧が行なわれている。

d　（第14図 1 ～ 5　図版11－ 7 ～10）

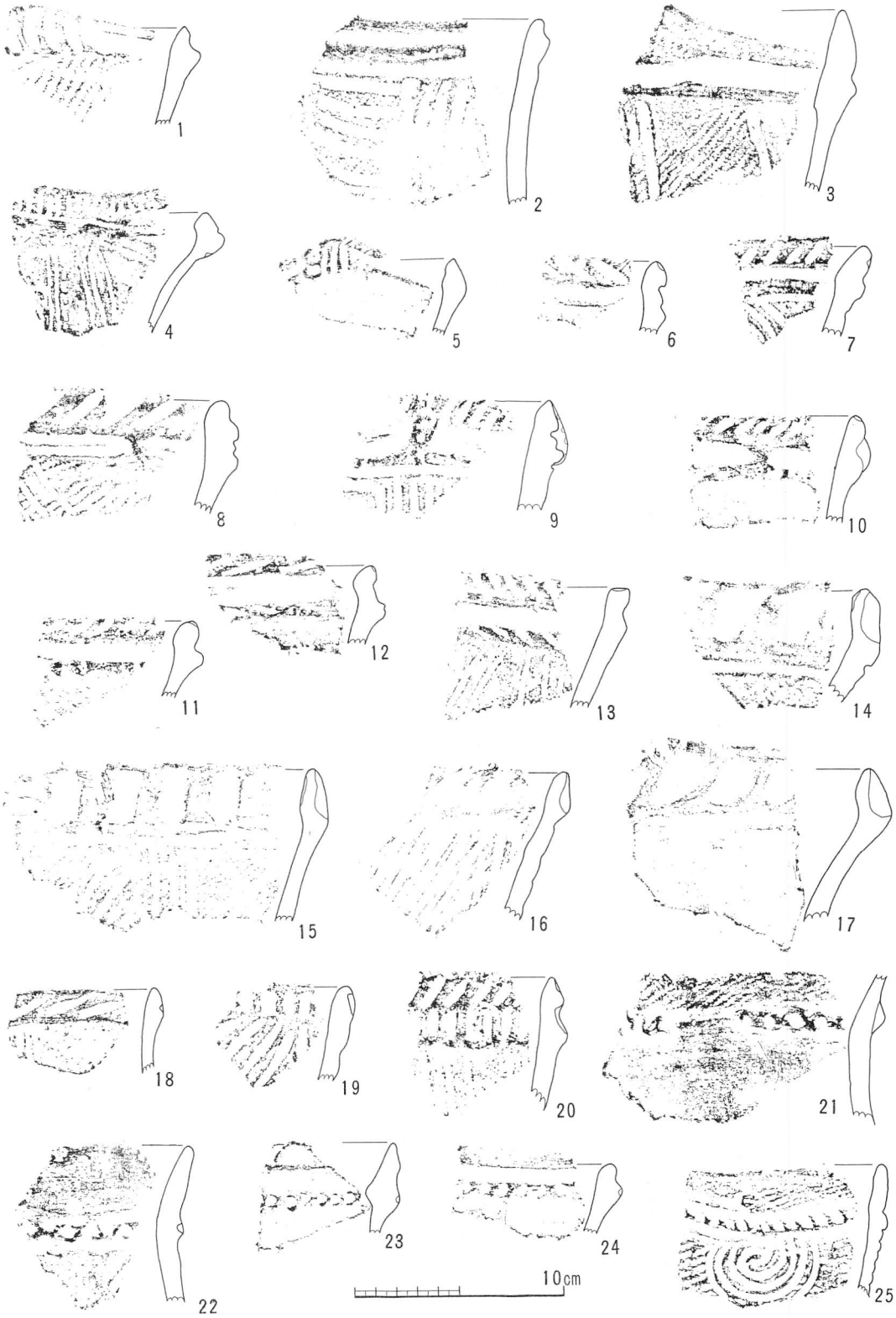
口縁部がゆるやかな波状を呈し、波状の突起部に丸窓を有するものである。1・3は、窓が1個であるが、2は窓が2個1組となっている。また、窓を中心にして1では刻目が、3には沈線が施されている。

第 12 類　（第13図21～25　第14図　第15図 9 ・10　図版 9 －14　図版11－ 1 ～6・11～28　図版12－15・18～20）

刻みのある隆帯を頸部にめぐらすことにより、口縁部無文帯と胴部文様帯を区画しているものである。その特徴から数種に区分できる。

a　（第13図21～25　第15図 9 ・10　図版11－ 1 ～ 6　12－15・18～20）

頸部に隆帯をめぐらし、隆帯上にヘラ状工具等による円形の刺突文や刻目が施された土器であ



第13図　　土　器（5）

第14図　土　器（6）

る。24は隆帯上方に、幅の広い沈線がめぐっている。25は口縁部が無文帯でなく、縄文が施され、隆帯下にはヘラ状工具による沈線の渦巻文が描かれている。9の胴部には刺突文が施されているが、口頸部はくの字状に外反するものではない。逆V字状の隆帯を付け、横位に走る隆帯が底辺となり、三角形を呈している。9は綱取Ⅰ式に類を求めることができよう。

b　（第14図7～9・13・14　図版11－11～14・23）

波状口縁を呈し、突起部が厚くラッパ状の形を呈しているものである。7・13は、突起部の縁にも刻目が施されている。

c　（第14図10～12　図版11－15～21　図版9－14）

波状口縁を呈し、突起部から粘土紐の貼り付けにより、S字状、あるいは逆S字状の刻目のあ

る隆帯が施されたものである。12の胴部には刺突文が施され、三十稲場式といわれる土器の代表的なものであろう。図版第９図14は、Ｓ字状の隆帯が付してあったが剥落したものであろう。

d　（第14図15～21　図版11－24～28）

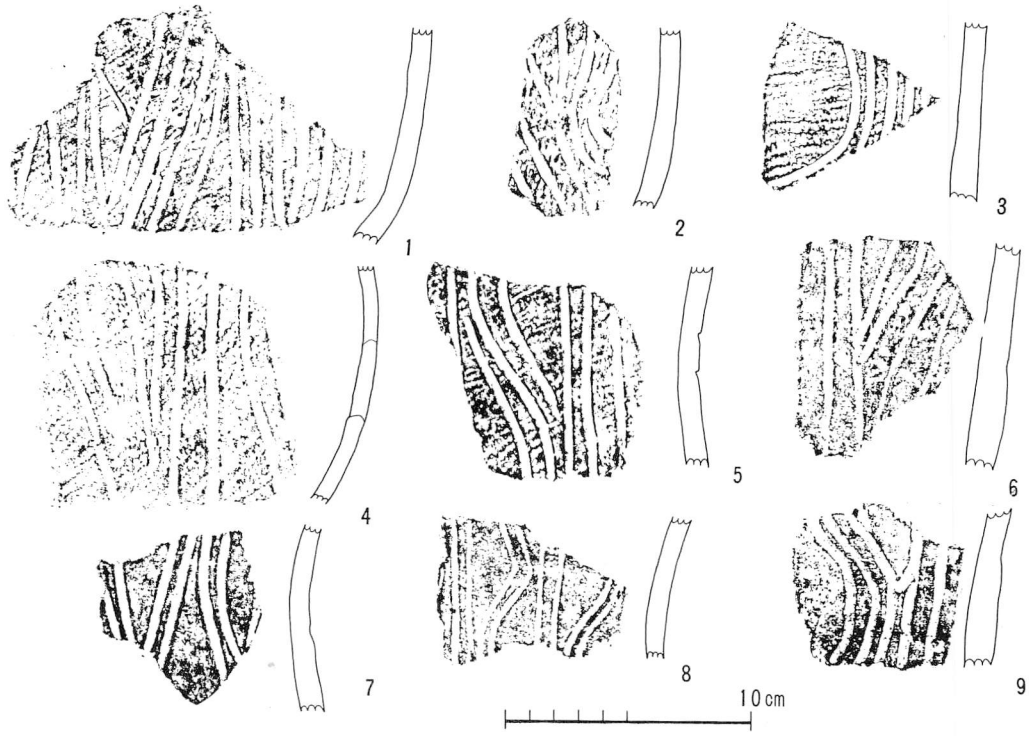
口頸部に橋状把手を付した一群である。15・16は、把手部のねじれが大きく、15の胴部には、縄文が施文されている。17の把手部は甕形土器の把手部ではなく、注口土器の把手部の可能性もある。21は、口縁部と胴部を区画する頸部の隆帯が無い。口縁と胴部の境がなく、ゆるやかな波状口縁を呈すものである。

第 13 類　（第15図　図版12－１～４）

いわゆる縁帯文系土器の胴部を本類とした。第11類の胴部となるものであろう。６～９は、無文地上にやや太い沈線を施したもので、他は、縄文を地紋としている。本類は、小砂を多量に含むもので、焼成良好なものが多い。

第 14 類　（第16図１・５　図版12－５・６・12）

頸部に連続刺突文を施すことにより、口縁部無文帯と胴部文様帯を区画しているものである。１の頸部には、横位によるやや大きい工具による刺突がめぐり、上下に縦位方行の刺突が行なわれている。口縁部は、きわめてよく研磨されている。精製された胎土で、焼成良好、黒色を呈す。５の頸部には三条の刺突文が施され、口縁部と胴部を区画し、胴部には縄文が施文されている。内面にはヘラ状工具によるナデ痕がみられ、全面に炭化物の付着が認められる。



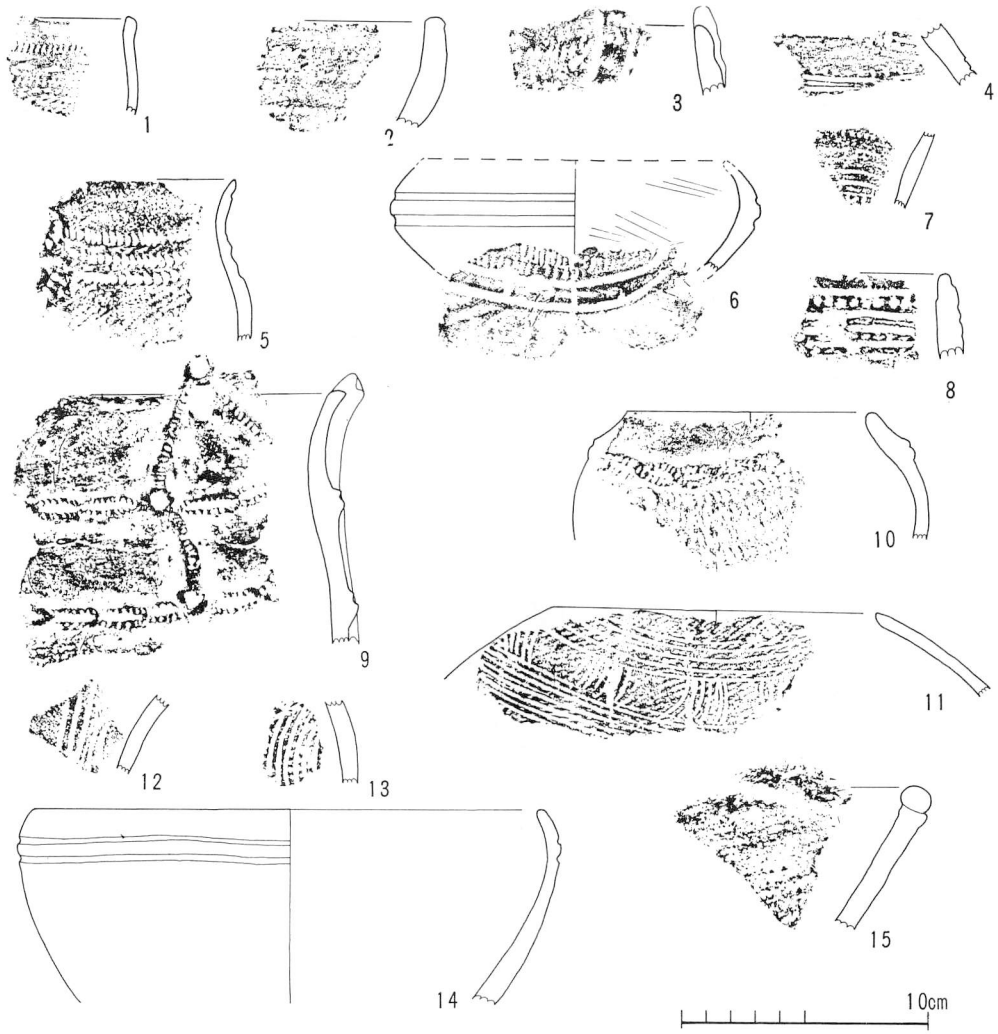
第15図　土　器（7）

第 15 類　(第16図 2～4・7・8　図版 8－7　図版12－7～11・16・17)

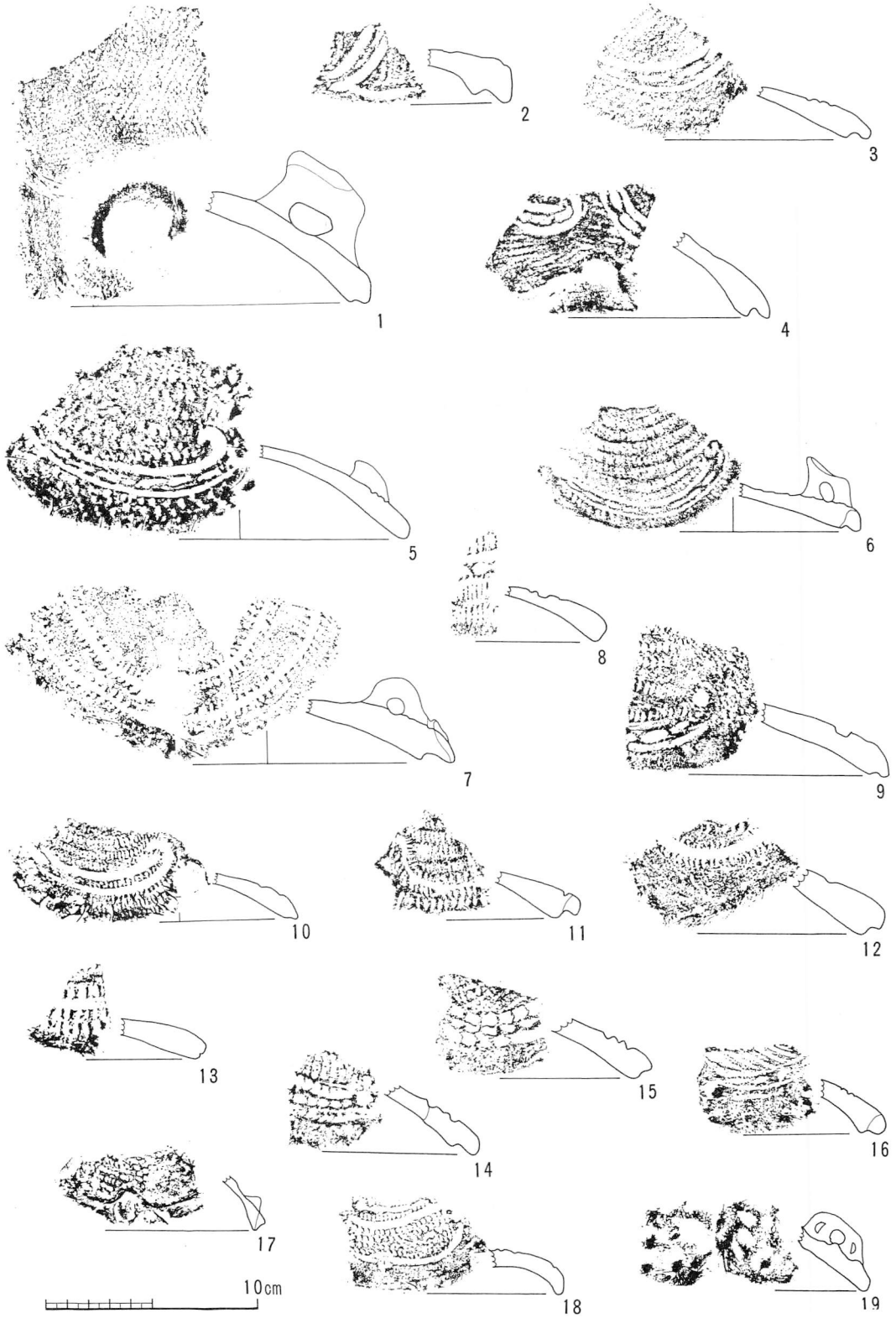
本類は、器面に刺突による施文が行なわれているものである。2・3は、器面に対し垂直方向から刺突したもので、4・7・8は棒状工具による円形の刺突文である。本類の刺突文は、三十稲場式土器にみられる刺突文と相様を異にするものである。

第 16 類　(第17図　図版12－21～31)

蓋形土器を一括した。ほとんどが笠形を呈し、口縁に抉り込みが施されたものが多い。器面には縄文や刺突による施文が行なわれ、太い沈線がめぐるものがある。耳取遺跡において、三十稲場式にみられる刺突文を分類しているが(註1)、5は、そのうちの花弁状刺突文に含まれよう。19は、いわゆる突瘤文土器(註2)と称されるもので、橋状把手を付している。1の把手は、C字形を呈している。本類は砂粒を多量に含んでおり、クリーム色を呈しているものが多い。また第23図12は、縁にわずかであるが抉り込みが確認され、本類の範疇であろうか。



第16図　土　器 (8)



第17図　土　器　(9)

第 17 類　（第18図　図版13－1～5）

器面全体に櫛歯状の工具を用いた条線文が施されたものである。1・2・11は、比較的太い工具による直線の条線文で、他は、曲線的な文様を描いている。10の口縁部上端に突起を有する。条線は、7～8本を1単位とするものが多い。いずれも焼成良好であるが、砂粒を多量に含むものが多い。比較的時期的な幅がある土器であろう。

（第12図13～15　図版8－13～16）

縄文を地紋とし、連続S字状の沈線か垂下するものである。13は渦巻状の沈線が施され、縁に刻目が施文されている。13・14は、赤褐色を呈し、堅質である。15は砂粒、金雲母を多量に含む。本類は、堀之内Ⅰ式に類を求められると考えられる。

第 19 類　（第16図6・11～15　第9図　図版13－6～20）

本類は、器面全面を細い平行沈線などにより描いているものである。第13類のものと比較すればかなり薄手で、よく研磨されているものが多い。1は、ゆるい波状口縁を呈し、突起部には刻目が施されている。縄文を地紋とし、頸部に細い沈線による渦巻文が大・小2個描かれている。第19図6～8は、きわめて丁寧に研磨されていて堅緻な感じを受ける。黒色を呈す。第16図6・14は、頸部に2条の平行沈線が施されているもので、6は口縁部にかけ刺突文が施文される。椀形を呈すものと思われる。14は加曽利BⅠ式に併行するもの、第19図1は堀之内Ⅰ式、3・10は堀之内Ⅱ式に併行するものと考えられる。9は鉢形土器の口縁部で、口縁内部に数条の溝がめぐっている。三仏生式に比定されるものであろう。

第 20 類　（第20図　図版14－1～9）

注口土器を一括した。本類は、きわめて砂粒を多量に含むもので、クリーム色を呈している。1は把手を中心に、左右対称に7～8㎜の太い沈線による隋円状の渦巻文を描いている。2・3は注口部で、内径1.5～1.8㎝を呈す。4・5は同一個体と思われる。

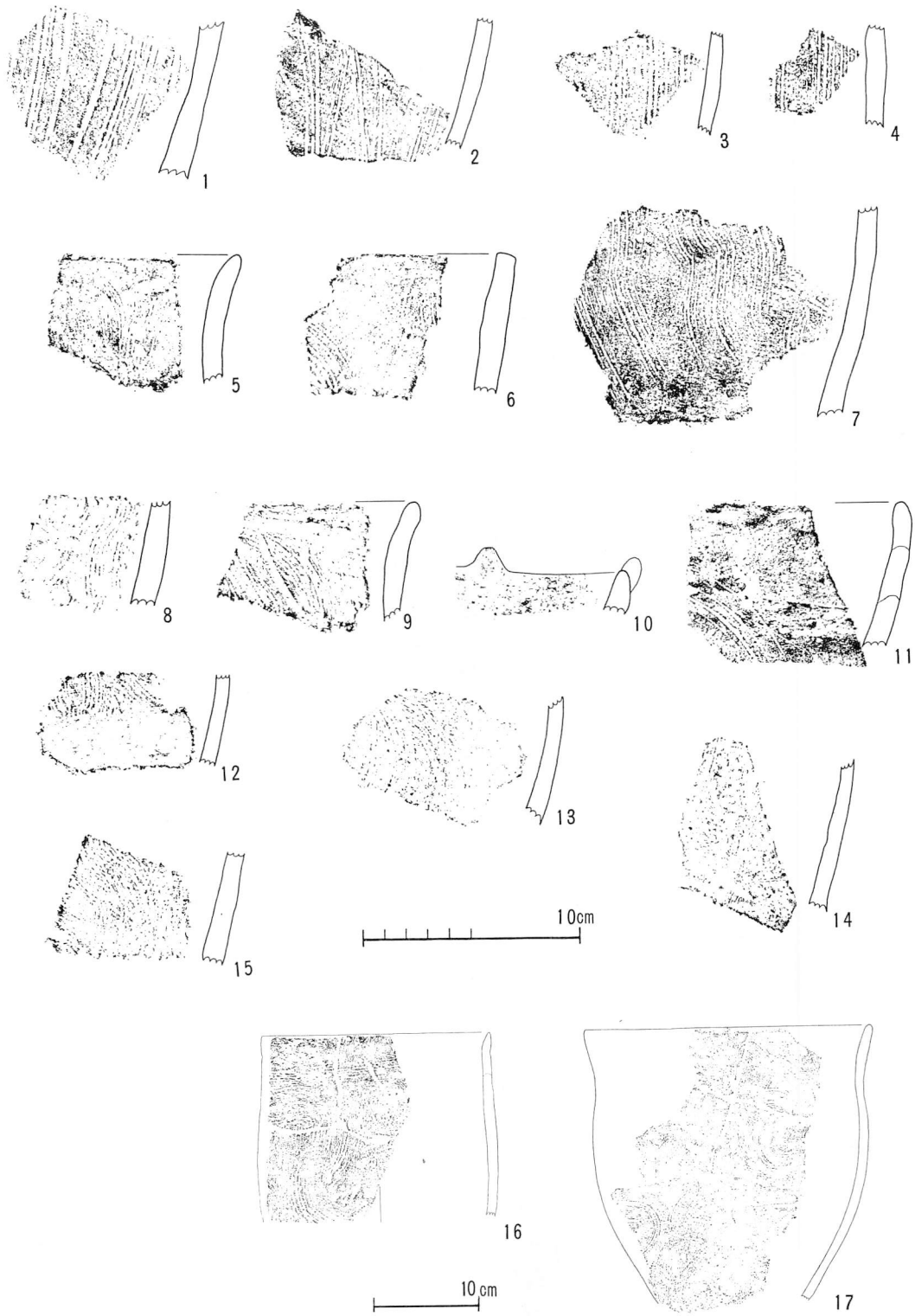
第 21 類・ミニチュア（第21図1～8　図版14－1～15）

図示した8個体が全てである。1の丸底以外は平底を有し安定感のあるものが多い。器形全体を知り得るものは1、3のみであるが、その他も同様に朝顔形の杯形であろう。成形に当っては手捏というよりは入念な調整痕が見られ、1は篦状工具によるナデ、3・4は指ナデによる面取が器面全体に見られる。8の内面には棒状工具の横ナデ痕が見られる。1は1号住居址床面に近い覆土より出土し（図版4－2参照）、3はB－14区において土偶頭部（第23図2）と伴出した。

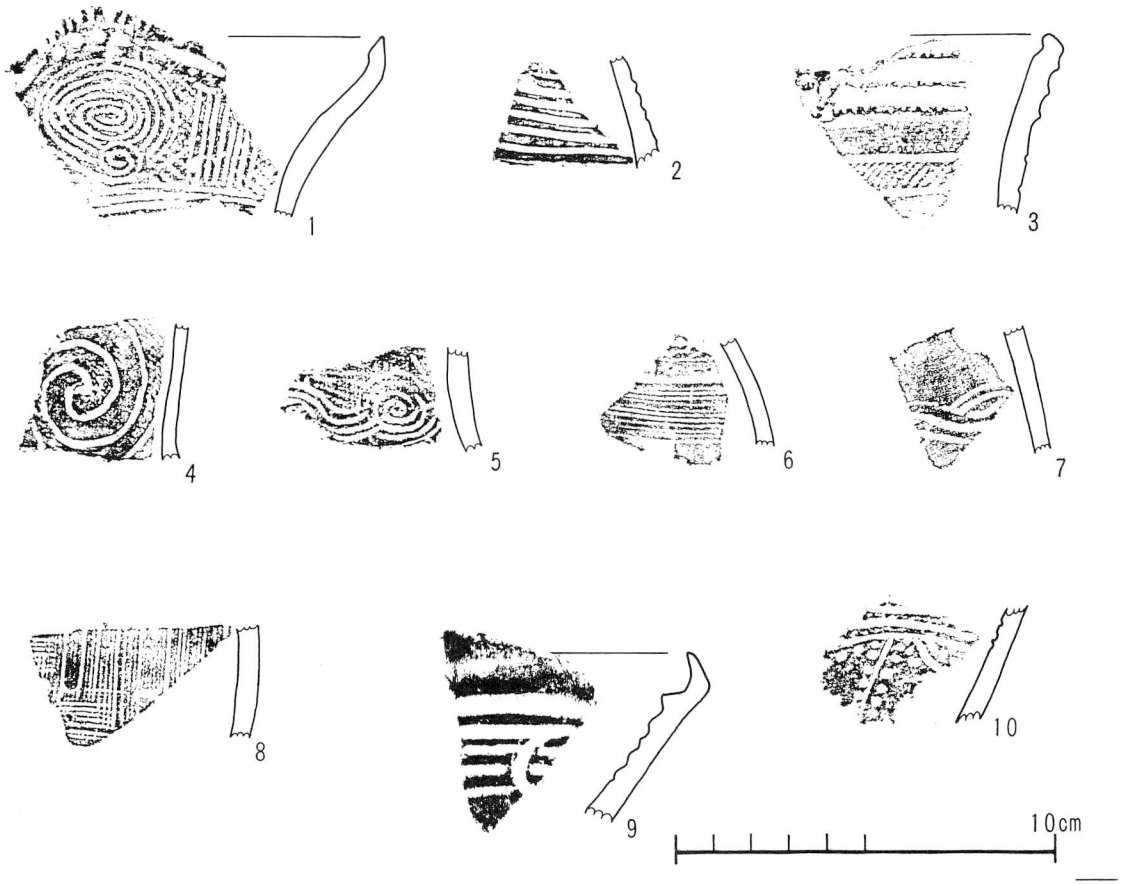
第22類・底部　（第21図9～11　第22図　図版14－16～23　15－1～11）

a　平底　出土量の大多数を占めるものは平底で底面は無文の物の他に第22図に示した如く網代痕、笊目痕等の圧痕が見られる。底径は大小があり最大径18㎝より最小径4.5㎝を計る。これらの内器壁の立上りによる器形等から、第22図14～16は縄文中期に属するものであるがその他は不明である。

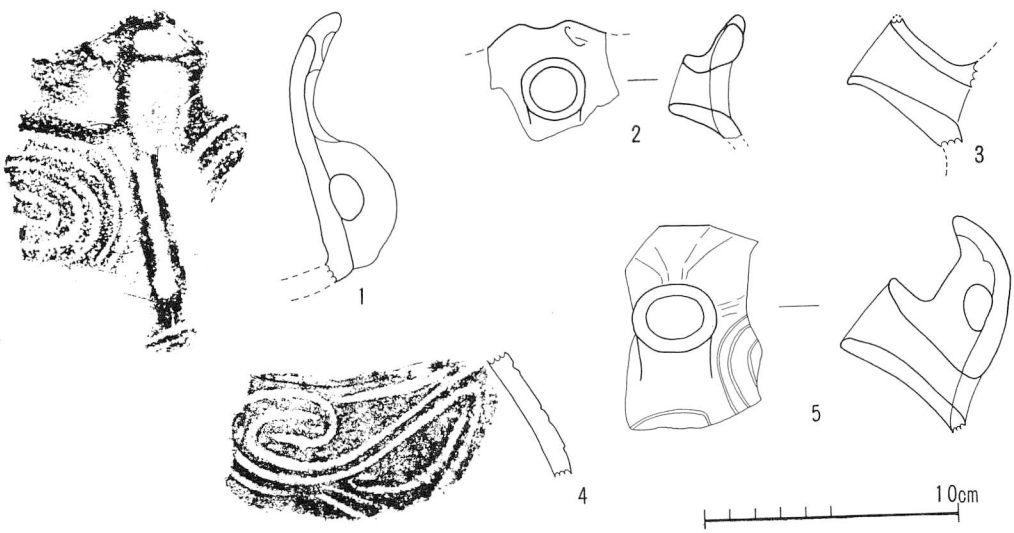
b　あげ底　いわゆる低い高台を有するもので、その技法は削出しによるものである。第22図1～4・6・9があるが9はやゝ不確定である。概ね荒い砂粒を多量に含んだ胎土で黒味を帯



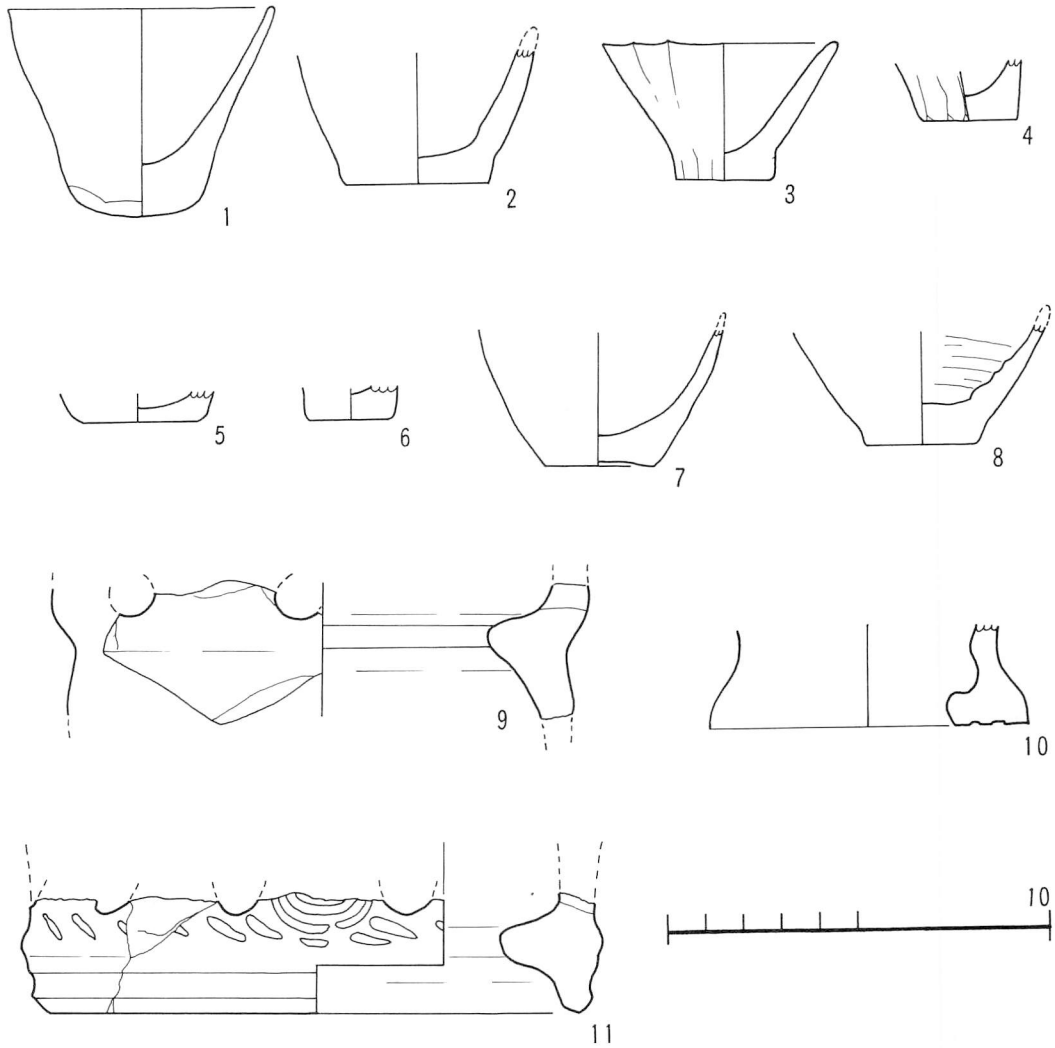
第18図　　土　器 (10)



第19図　土　器 (11)



第20図　土　器 (12)



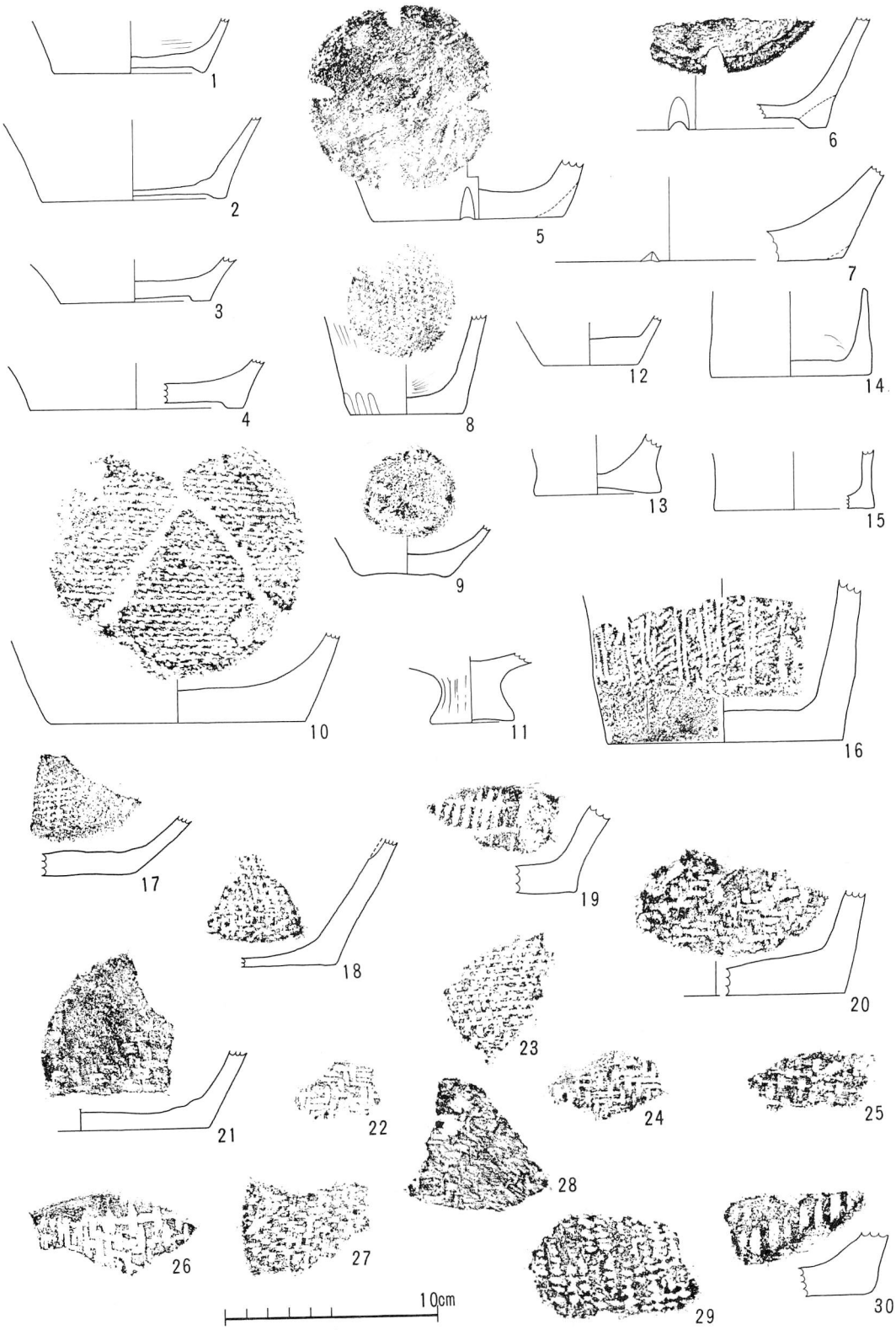
第21図　土　器 (13)

びるものが多い。縄文後期に属するもので三十稲場式土器の底部と考えられよう。

c　脚　第22図11は、底径4㎝、脚高2㎝と低いが脚式の底部を有するものである。側面には0.5～0.7㎝幅の工具による調整痕がある。

d　高台　第21図9～11に示したものであるいは器台とも考えられるものであるが、一応台付き鉢の高台部分として報告する。9・10は側面に円孔（窓）を穿、内面に凸帯を有する。9は細片の為不明であるが11はU字の刻文と浅い沈線を有し、端部は面取りがなされている。10は小形のもので、地付き部分が2㎝幅と広く細い2条の沈線が走る。

e　その他　以上に報告した平底とあげ底を有するものの内、吊紐の溝を刻むものがある。図版15－1～4がそれであり、第22図5～7の如く断面がU字状のものとV字状のものとが見られる。吊手土器として造られたもので焼成前の刻目である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
10cm

第22図　土　器 (14)

末分類（図版９－１～13・15）

１・２は口縁部付近の破片で、半隆起線が全面的に施され、半隆起線の区画内に斜格子目文が施文されている。１～６は中期前葉の新崎式に、７は大木８ｂに比定されるものと考えられよう。８は比較的幅のある半裁竹管を用い、山形口縁の上端を縁どったものであり、山形の頂部と横位の隆起線が底辺となり三角形を呈したものである。中央部に突起がある。中期前葉のものであろう。10は数条の平行沈線による縦位の区画内に、棒状工具による円形の刺突文が施されている。川原第３類ｄに類例を求めることができる。12は縦位の平行沈線を中心に、左右両方に三角状沈刻が行なわれている。15はキャリパー状の口縁部で、口辺部には竹管による縁どりが行なわれている。

第23図　土　製　品

2．土 製 器（第23図、図版15－12～26）

土製品の出土は第23図に示したものが総てであり、土偶6、土錘2、土玉1、土版3である。

1）土偶　1は板状の胴部で頸部、両手、下半身を欠失し、さらに右乳房が剥離している。胸部上方に横位の沈線があり背面の両端にも見られる。2・4はハート形の顔面部分の残欠である。2の目と4の目、口は粘土塊を張りつけたもので、顔面は共にえぐれている。2の口、耳には小孔を穿、4は目から頬、顎にかけて沈線が施されている。3は完形品で小さな目鼻を有するものであり、6は右手の残欠である。5は内側に弯曲した左脚部残欠で前面には5段の刻みと刺突痕が見られる。尚5と2は同一個体の可能性があるし、4と共に縄文後期に位置するものであるがその他は不明である。

2）土錘　8・9共同形のもので長身の俵状の胴部に3筋の溝がそれぞれ一周する。土錘としたが或るいは他の目的を有するものかも知れない。第1号住居址内の出土である。

3）土玉　球状土製品で全面に2条を基本とする沈線によって不定な曲線模様が描かれている。第1号住居址内の出土である。

4）土版　10・11は程同径の円形土版であるが、10は後代に見られる有紐鏡形土製品と同様中心部に紐を有するものである。12は直径13㎝程の円版残欠品で中央部に橋状把手と思われる2箇所の剥離痕がある。表面には6条のU字状沈線が巴状に施されている。成形に当っては薄い粘土板を4枚重ねたことが窺われる。蓋形土器の可能性も強い。

尚、図版15－18～20は蓋形土器の把手部分である。

3．石　器

石　匙（第24図4　図版16－1）

縦型石匙で、硬質頁岩を用いている。つまみ部が欠損している。長さ53㎜、幅42㎜、厚さ8㎜重量18gを計る。

掻　器（第24図2　図版16－2）

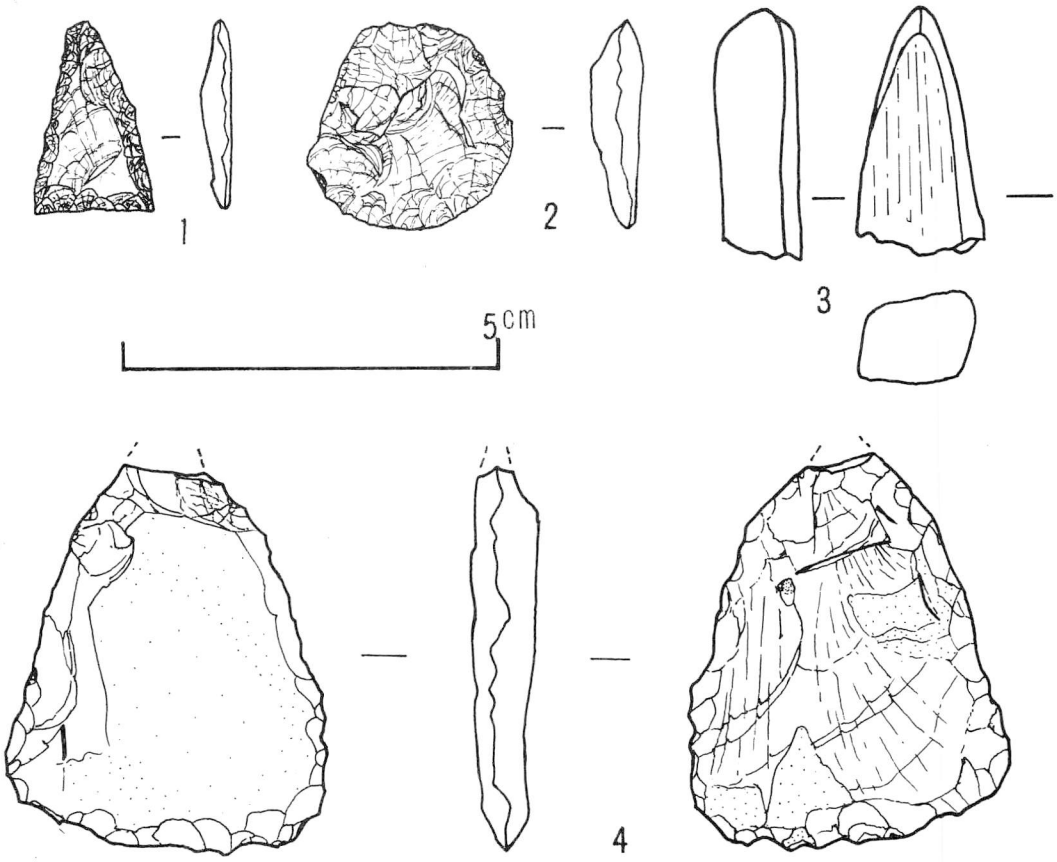
いわゆる円形スクレイパーである。石質は硬質砂岩で、剥片の全面に刃部を作出している。長さ28㎜、幅27㎜、厚さ7㎜、重量6gを計り、ライトピンクを呈する。

石　鏃（第24図1　図版16－3）

本調査では、1点の出土であった。石質は硬質頁岩で、刃線が直線的で、無柄、二等辺三角形を呈している。長さ26㎜、幅15㎜、厚さ3㎜、重量3gの小型品である。

磨製石斧　（第24図3　第25図1～5　図版16－4～12）

本調査で出土した磨製石斧は9点で、完形のものは1点で、他の8点は全て欠損している。5は蛇紋岩を用い、精巧な研磨がなされたもので、刃部に若干の破損が見られる。2の頭部は巾も広く、横断面は長方形を呈する。図版第16図8は、磨製石斧では最小のもので、横断面は三角形を呈する。本類に属さない可能性も強い。



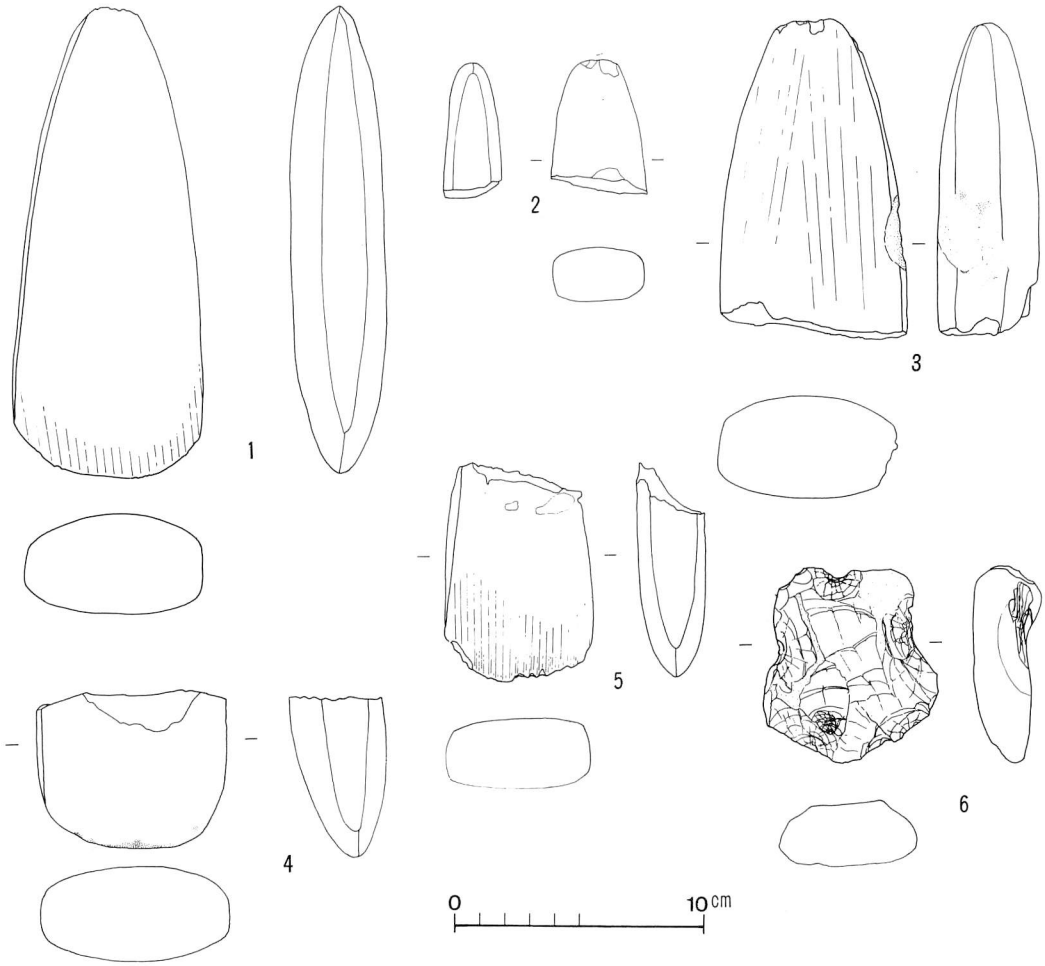
第24図　石　器 (1)

番　号	石　　質	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	図版番号
1	粗粒安山岩	18.7	7.4	3.9	760	16 − 6
2	輝　縁　岩	(5.4)	3.7	2.1	80	16 − 11
3	粗粒安山岩	(12.5)	7.2	4.1	550	16 − 7
4	〃	(6.2)	7.3	3.8	244	16 − 5
5	蛇　紋　岩	(8.8)	6.0	2.8	235	16 − 4
＼	輝　縁　岩	(3.3)	1.2	1.2	10	16 − 8
＼	粗粒安山岩	(5.5)	4.7	2.5	102	16 − 10
＼	閃　縁　岩	(6.1)	3.	2.6	93	16 − 12
＼	輝　縁　岩	(5.6)	3.5	2.6	99	16 − 9

第2表　磨製石斧計測表

実測番号	石　　質	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	図版番号
1	花　崗　岩	7.8	6.9	2.6	159	16 − 14
2	粗粒安山岩	9.4	5.1	1.8	128	16 − 13

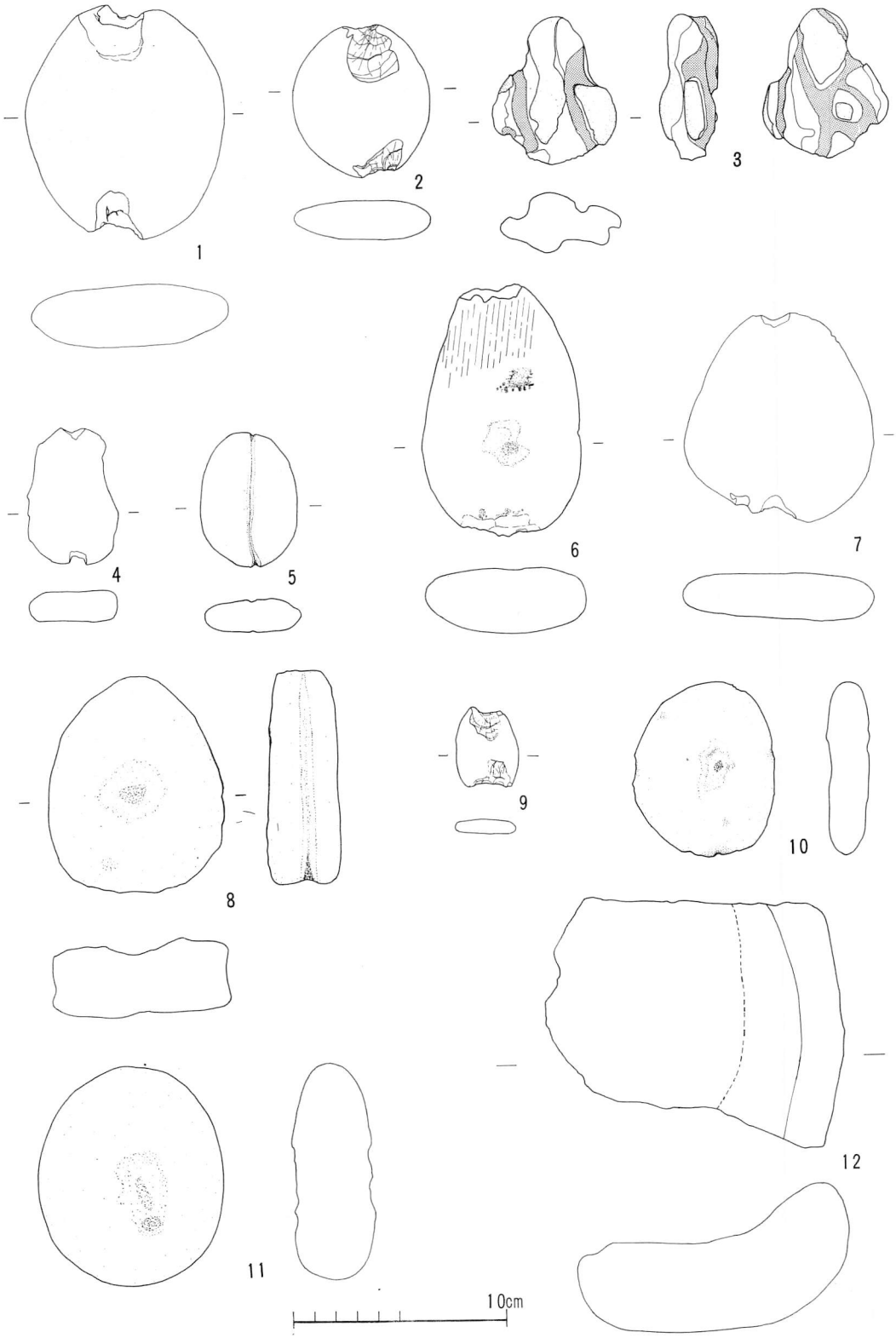
第3表　打製石斧計測表



第25図　石　器（2）

実測番号	石　　質	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	図版番号
1	花　崗　岩	11.0	9.1	2.9	395	16－20
2	硅　質　頁　岩	7.1	6.4	1.9	99	16－18
3	結　晶　片　岩	6.8	5.8	7.6	82	16－24
4	流　紋　岩	6.4	4.2	1.4	52	16－17
5	硅　質　頁　岩	6.3	4.5	1.8	51	16－23
6	輝　緑　岩	11.7	7.4	3.0	372	16－21
7	粗粒安山岩	9.7	8.9	2.1	253	16－19
8	安　山　岩	10.0	8.3	3.5	30	16－25
9	粗粒安山岩	3.7	2.9	0.7	12	16－18
＼	安　山　岩	4.9	8.5	2.4	145	16－22
＼	安　山　岩	4.0	4.0	1.2	33	16－16

第4表　石錘計測表



第26図　石　器（3）

実測番号	石　　質	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	図版番号
1	安　山　岩	10.6	8.5	3.7	462	16 − 11
2	石英粗面岩	8.2	6.5	2.0	128	16 − 10
3	花　崗　岩	10.2	6.4	3.0	251	
4	〃	7.9	7.1	4.2	250	
5	〃	8.5	7.6	3.8	331	
6	〃	13.5	8.3	3.2	534	
7		11.6	6.1	4.5	180	
8	花　崗　岩	8.1	7.6	4.6	363	
9	〃	11.5	6.8	4.2	426	
10	〃	(5.6)	7.0	2.4	149	
11	〃	8.4	7.6	3.7	280	
12	流　紋　岩	(7.9)	8.0	3.2	234	
13	安　山　岩	(8.0)	7.2	3.3	273	
14	花　崗　岩	7.7	7.3	3.3	278	
15	安　山　岩	(5.6)	8.1	2.8	156	
16	花　崗　岩	(7.5)	9.2	3.1	345	
17	安　山　岩	8.8	8.5	2.1	252	
18	〃	10.6	(8.7)	2.2	225	
19	花　崗　岩	8.8	7.6	6.8	398	
20	流　紋　岩	8.1	8.1	3.5	116	
21		(4.5)	5.8	3.4	109	
22	安　山　岩	(8.9)	9.4	3.5	300	

第 5 表　凹石計測表

打製石斧　(第25図6　図版16－13・14)

6は、分銅形を呈したものであったと思われるが、上端刃部の破損によりやや不定形となっている。部分的に自然剥離面を残すものである。図版第16図13は、上下両端部を剥離して刃部を作り出しただけの粗雑な石斧である。粗粒安山岩である。

石　錘　(第26図1～9　図版16－15～23)

石錘の出土は11点にのぼり、うち3点が欠損しているが、他は完形である。多くが河原石などの長軸両端を打ち欠いただけのものである。また、5は長軸両端にかけて両面に線刻が行なわれている。3は礫の四方以上を打ち欠き、抉り込みを作出しているもので、結晶片岩を用いている。長さ68㎜、幅58㎜、厚さ76㎜、重量82gを計る。8は縁の全周辺に浅い抉り込みをもち、紐掛等を行なったものと思われる。また両面に凹みが認められ、凹石として使用された可能性も強い。

磨　石（図版26－26～29）

磨石は3点出土した。27は全面に非常に滑らかに研磨されているものである。28は焼けた痕跡が見られるもの、29はカル石である。

凹　石（第26図10・11　図版17－1～28）

特徴的なものを第26図10・11に示し、他は写真図版とした。本遺跡出土の凹石は、花崗岩が半数を占め、両面に凹穴をもつものが多い。

石　皿（第26図12　図版18－26～30）

12は浅鉢形を呈する石皿であろう。厚さ4㎝前後であるが、比較的軽量な感じをうける。12は円形、図版18－32は長方形状を呈するものと考えられよう。

そ の 他　本調査において多種の原石が検出された。図版17－38は黒曜石に酷似の、黒色石英（硬度7）であり、本丘陵地帯から産出されるものであろう。尚、図版18－13は過去の表採品の磨製石斧で、右から2つが蛇紋岩、安山岩、砂岩である。

（川上貞雄・遠藤孝司）

註1　関　雅之「耳取遺跡」見附市教育委員会　1971

註2　中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館　1966

Ⅳ　ま　と　め

以上、当調査において検出した遺構、遺物について報告した。すでに序章にても記述したところではあるが遺跡の所在する丘陵東面には宮古、八幡平、赤坂、下野山の縄文遺跡を見るのみで丘陵西面に比較してかなり少ない。然しながらこの小口地区には当遺跡を始め居平遺跡が報告されているし、最近ではさらに同地区北方に縄文土器の散布する２地点が報じられている。

当調査は遺跡のごく末端部分の小範囲に終始し、故に遺跡全体についての考察は控えざるを得ない。検出された住居址は縄文中期前葉と同後期前葉のもので共に斜面に位置するものである。

特に第１号住居址は斜面を段状に切り取ることによって営まれ、周溝の存在は地形上必然的な要素であろう。今、近隣での類似例を知見しない。

土器は第１類から第22類までに分類してみたが、本遺跡は二つの時期に亘るものと考えられる。第１類～第９類は中期初頭・前葉、第11類～第19類が後期初頭・前葉・中葉に位置付けられるものであろう。

第１類～第３類は新崎式にみられるが、本地方では中期前葉の遺跡においても普遍的にみられるもので、千石原Ⅰ群に代表されるものである。第４類は半隆起線によって変化に富んだ文様を描いているもので、県内では上野遺跡の胴部ａグループに類似するものがある。第５類は三角状沈刻を加えれば、いわゆる蓮華文となり得るもので、県内では古屋敷４類、中道３類などに類例を求めることができる。また、吉野屋では蓮華文を古い順にＸ・Ｙ・Ｚの３グループに分けているが、本類はこのうち、『蓮華文の名残りをとどめた』とするＺにあたるものであろう。第６類は蓮華文の土器であり長峰第２類・吉野屋Ａ群第７類などに類例があるが、第11図11は施文手法からすると特異なものであろう。また、第11図16は、その施文構成は県内において類例を求めることができないものである。第７類は関東地方の五領ケ台、第８類は東北地方の円筒上層や大木７各式との関連が強いものと考えられる。第９類は木目状結束撚糸文で、北陸の中期初頭～前葉の遺跡にみられるものである。県内では上野８類、古屋敷12類、中道１類などに類例がある。

第11・13類は、いわゆる縁帯文系の土器の口縁・胴部片である。堀之内Ⅰ式に併行されるものであるが、かなり地域色の強いものも認められる。第12類は、いわゆる三十稲場式の土器であるが、くの字状に外反する口縁を呈しないものも認められる。また本遺跡において、三十稲場式土器にみられる特徴的な刺突文は、蓋形土器の器面にわずかに認められるが、それ以外の刺突文は第15類のように様相を異にするようなものである。また、第18類は関東の堀之内Ⅰ式、第19類も関東の堀之内各式、加曽利ＢⅠ式などの関連が強いものであろう。

また、当遺跡の特徴の一つに石器が少ない。これまでに採集されている石器も主に磨製石斧を中心とするもので特に剥片石器類が少ない。反面比較的大形の石錘を多く検出したことは当遺跡の生活基盤を物語るものであり、目下の能代川、前方の阿賀野川と切離してこの遺跡は考えられない。現在の小口部落がそうである如く、当遺跡も主も豊穏な台地に違いなかったであろう。

尚、本項では報告しなかったが第５図中にＢで記したものは４基の浅い土拡である。いずれも

基盤地層にわずかに到達する程のものである。この土拡よりいずれも細分化した骨片を検出した。これらは縄文遺跡とは関連しないものであろう。

本調査に当り何かと御援助賜った渡辺譲、渡辺久御夫妻、天野五平、新津図書館職員他多くの方々に謝意を申し上げる。(敬称略)

(川上貞雄・遠藤孝司)

■ 主な参考文献

- 中川成夫・岡本勇他「顕聖寺遺跡」浦川原村教育委員会　１９５９
- 江坂輝弥・可児弘明他「上野遺跡」津南町教育委員会　１９６２
- 藤田亮策・清水潤三他「長者ケ原」糸魚川市教育委員会　１９６４
- 中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館　１９６６
- 中村孝三郎・稲岡嘉彰他「朝日百塚・並松遺跡」越路町教育委員会　１９７０
- 関雅之「耳取遺跡」見附市教育委員会　１９７１
- 駒形敏朗・家田順一郎「ツベタ遺跡発掘調査報告書」安田町教育委員会　１９７３
- 中村孝三郎・竹田裕司他「千石原」長岡市立科学博物館　１９７３
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ孝古班「吉野屋遺跡」　１９７４
- 室岡博・関雅之他「長峰遺跡発掘調査報告」吉川町教育委員会　１９７４
- 馬目順一他「大畑貝塚調査報告」いわき市教育委員会　１９７５
- 本間嘉晴・関雅之他「浜田遺跡」真野町教育委員会　１９７５
- 中村孝三郎・中島栄一他「芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書」下田村教育委員会　１９７５
- 室岡博・本間信昭「兼俣遺跡」妙高高原町教育委員会　１９７６
- 中島栄一他「古屋敷遺跡」田上町教育委員会　１９７６
- 川上貞雄・渡辺文男他「中道遺跡」安田町教育委員会　１９８０
- 田中耕作「川原遺跡」(「遺跡範囲確認調査報告書」所収)新発田市教育委員会　１９８１

遺　跡　近　景

遺　跡　近　景

図版２

第１期発掘区全景

第１期発掘区全景

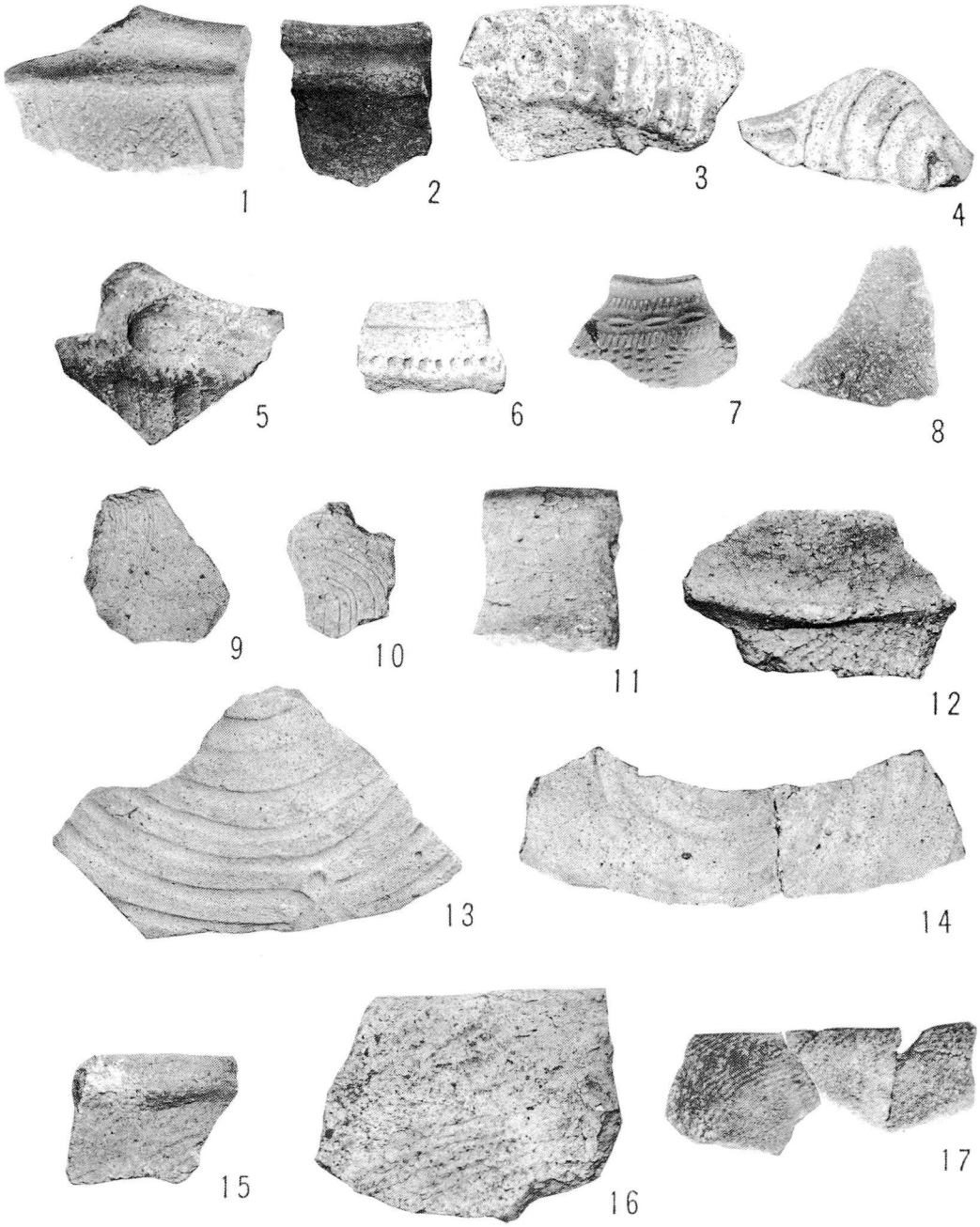
第 1 号 住 居 址

第 1 号 住 居 址

図版４

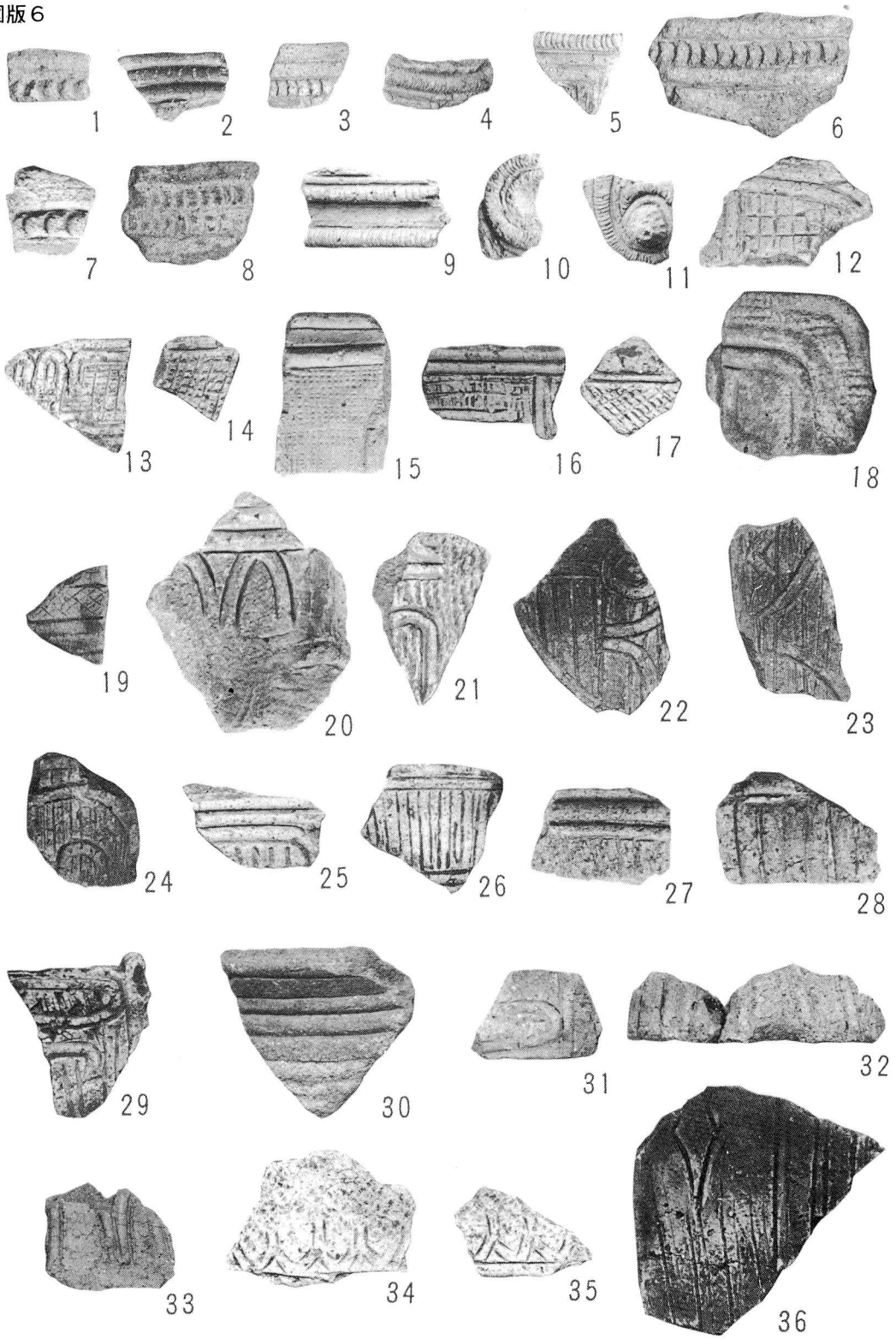
土坑内遺物出土状況

第１号 住居址４層遺物出土状況

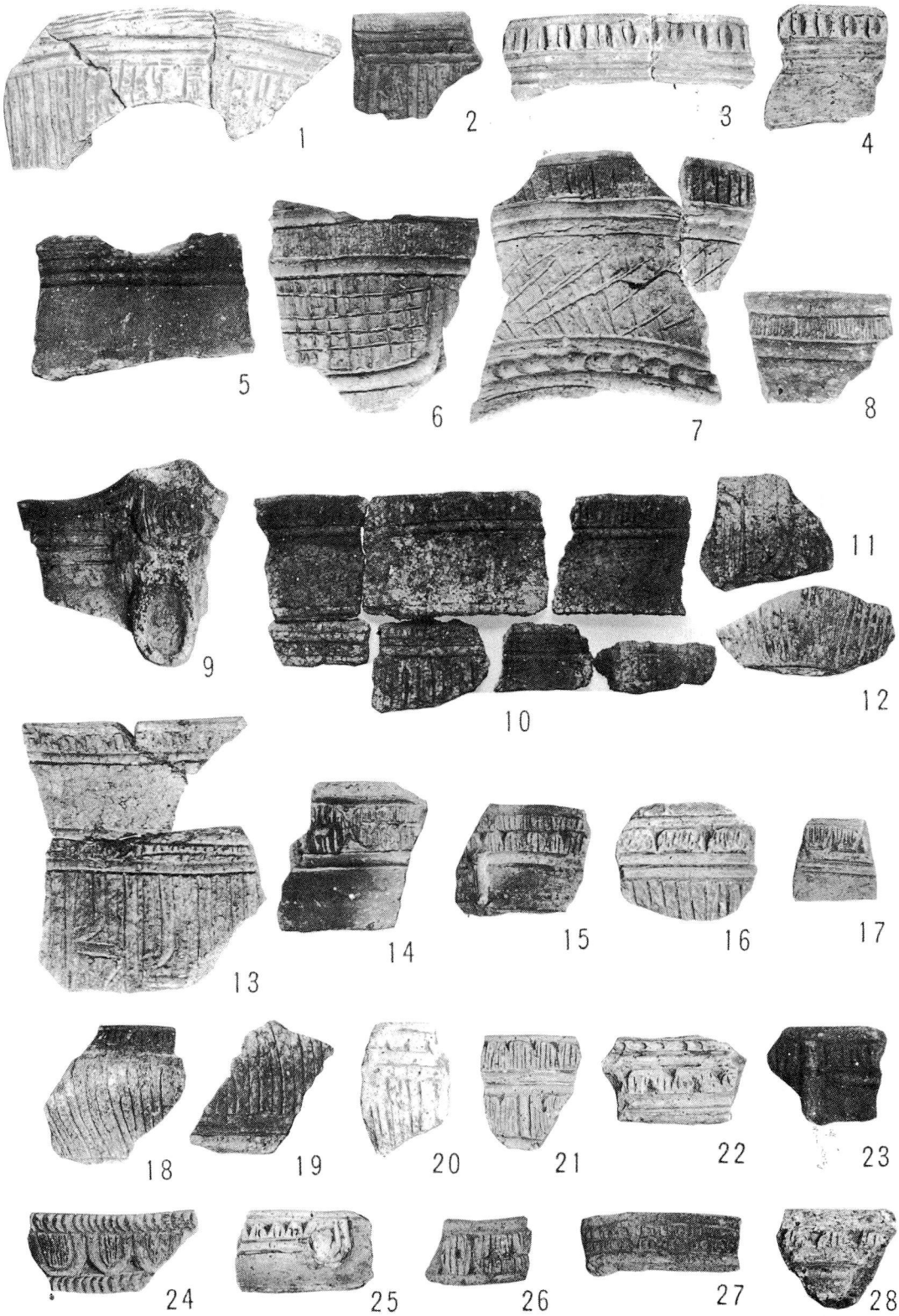


第１号住居址出土遺物

図版６

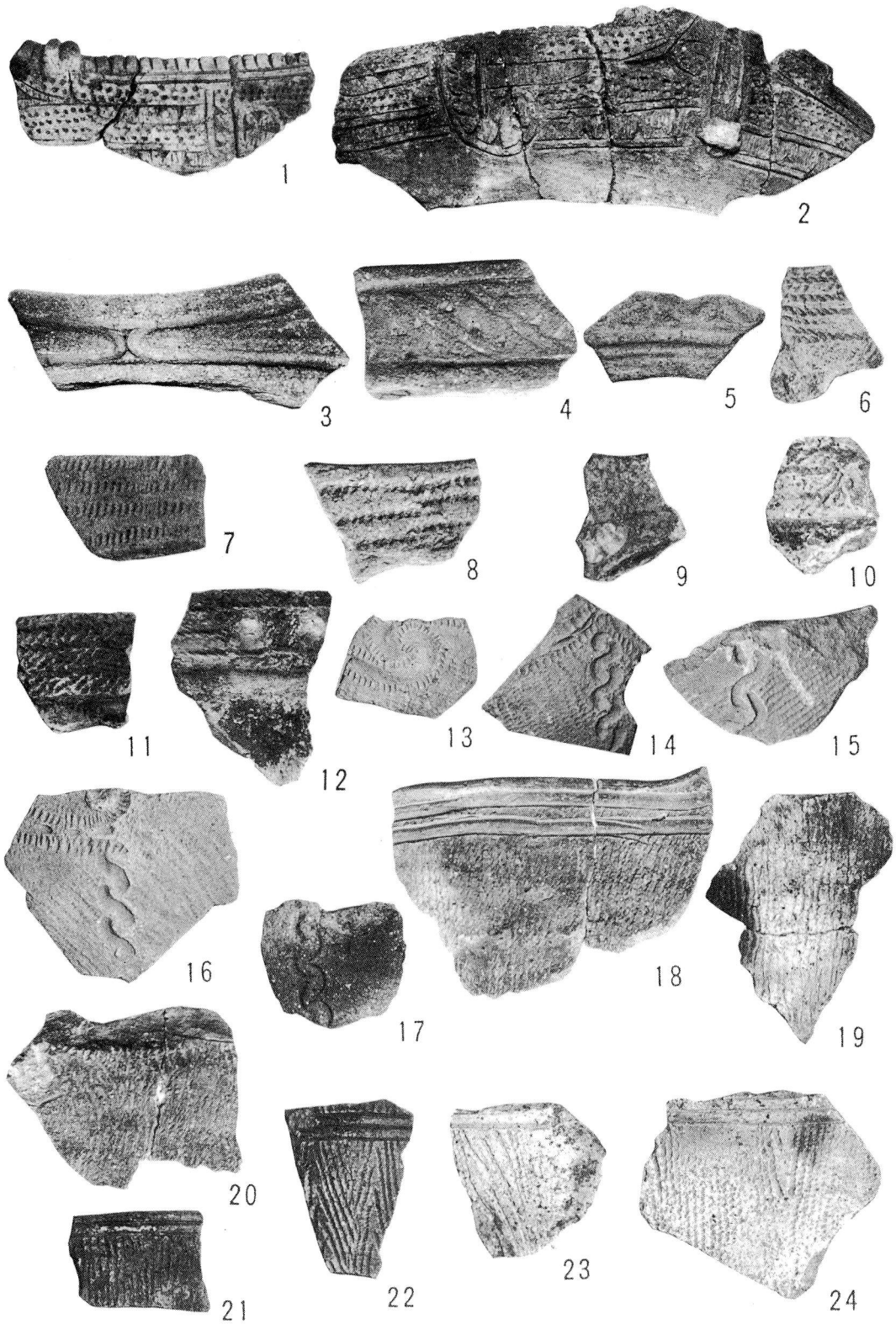

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

中　期　の　土　器

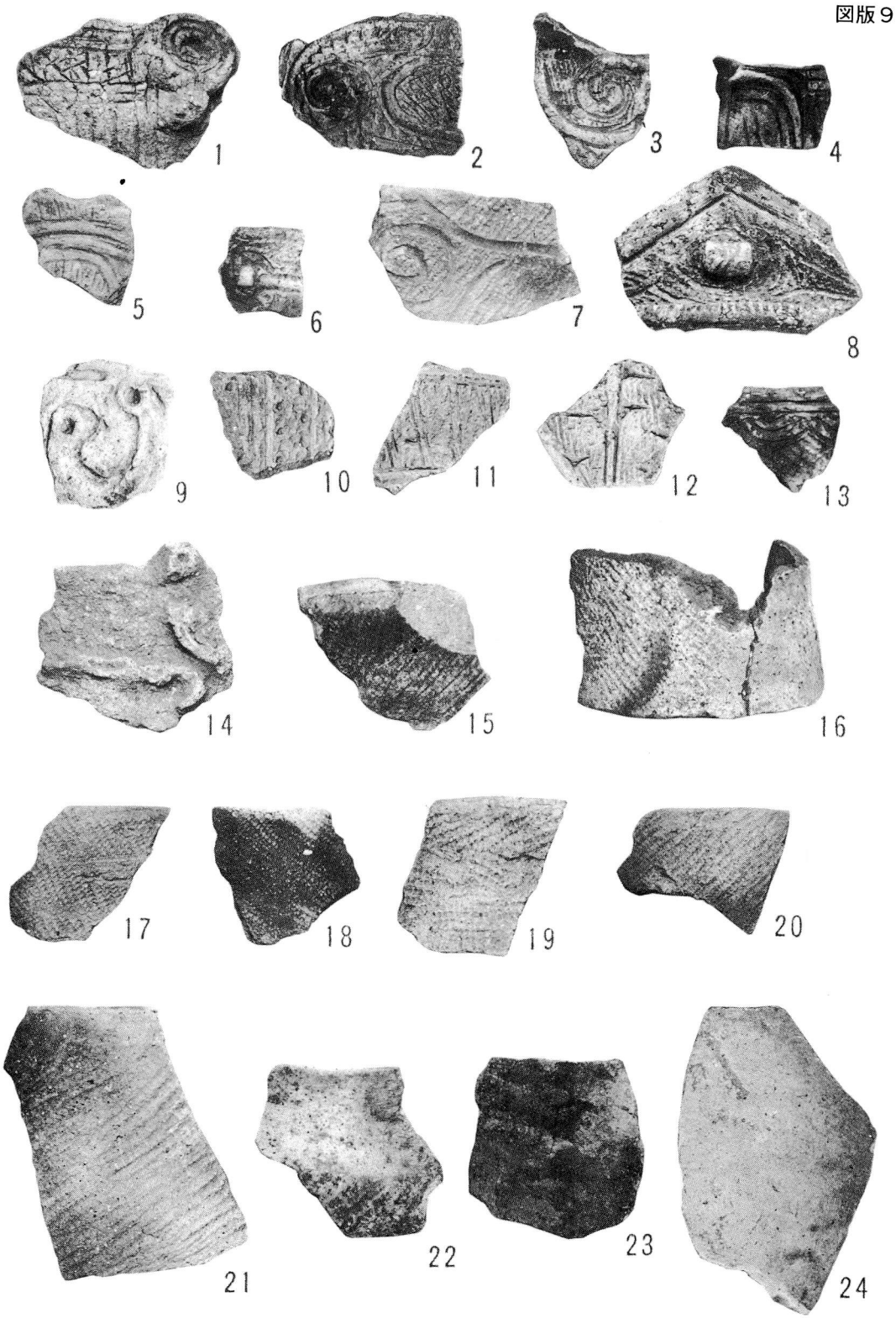


中　期　の　土　器

図版８

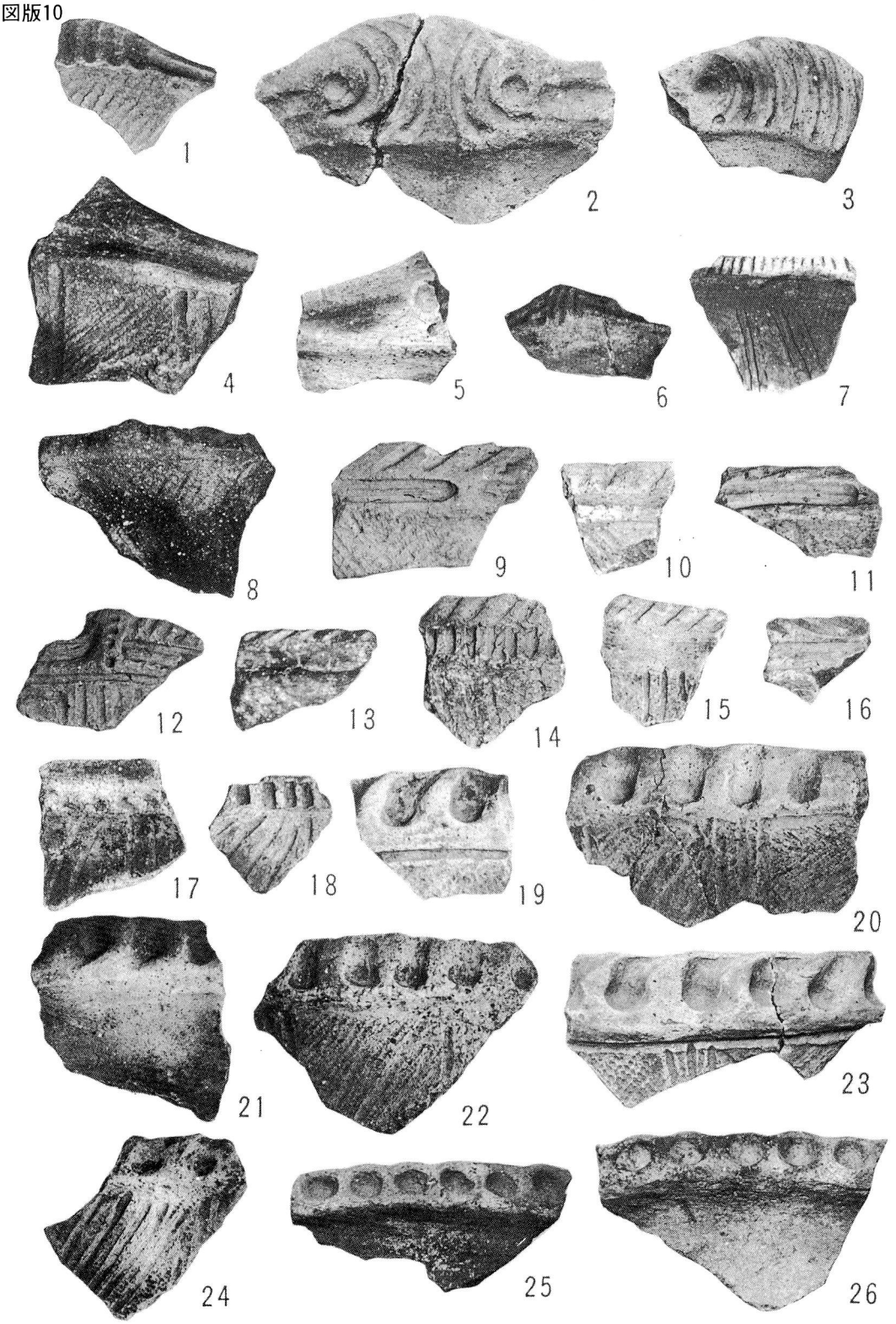


中期・後期の土器

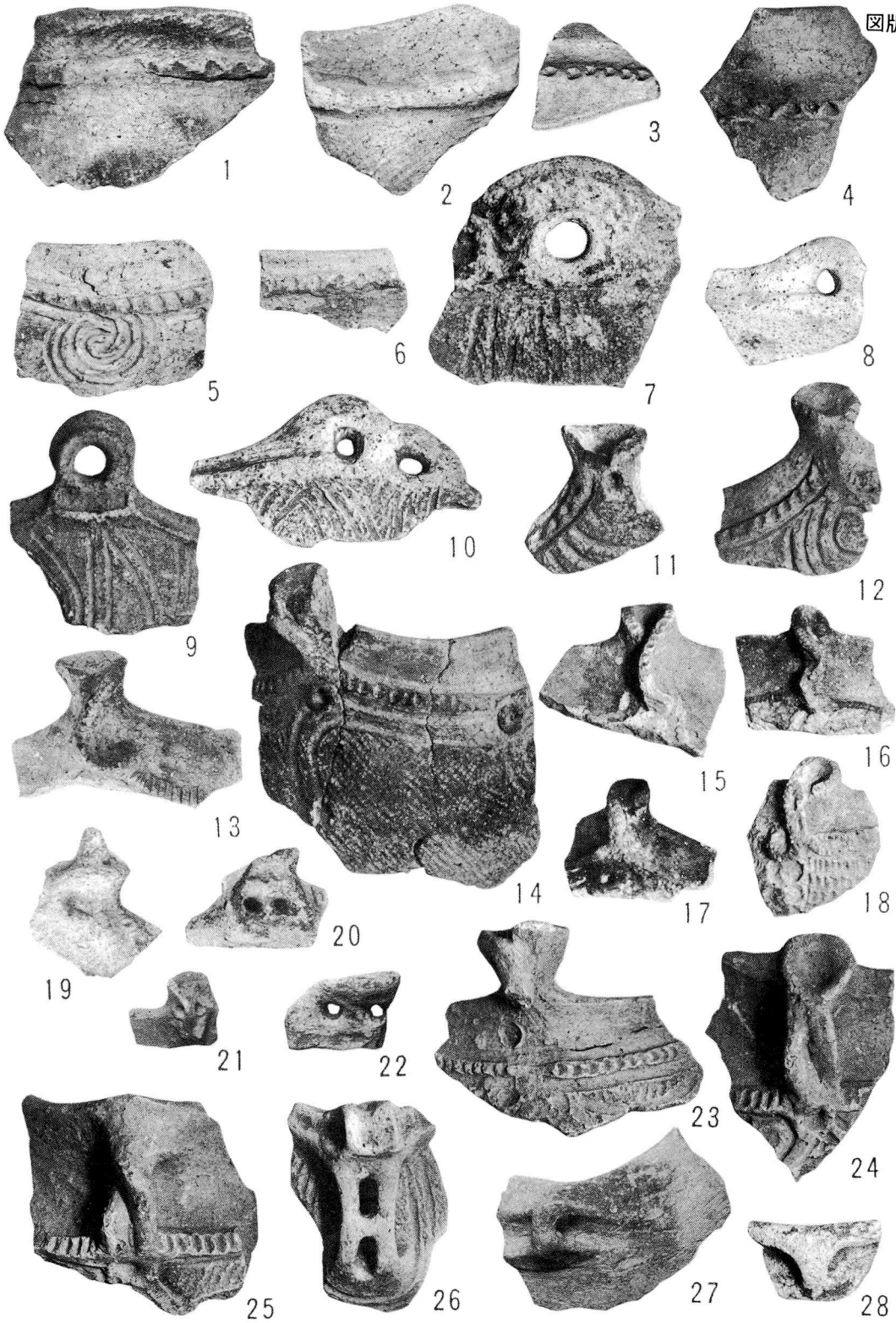


中期・後期の土器

図版10

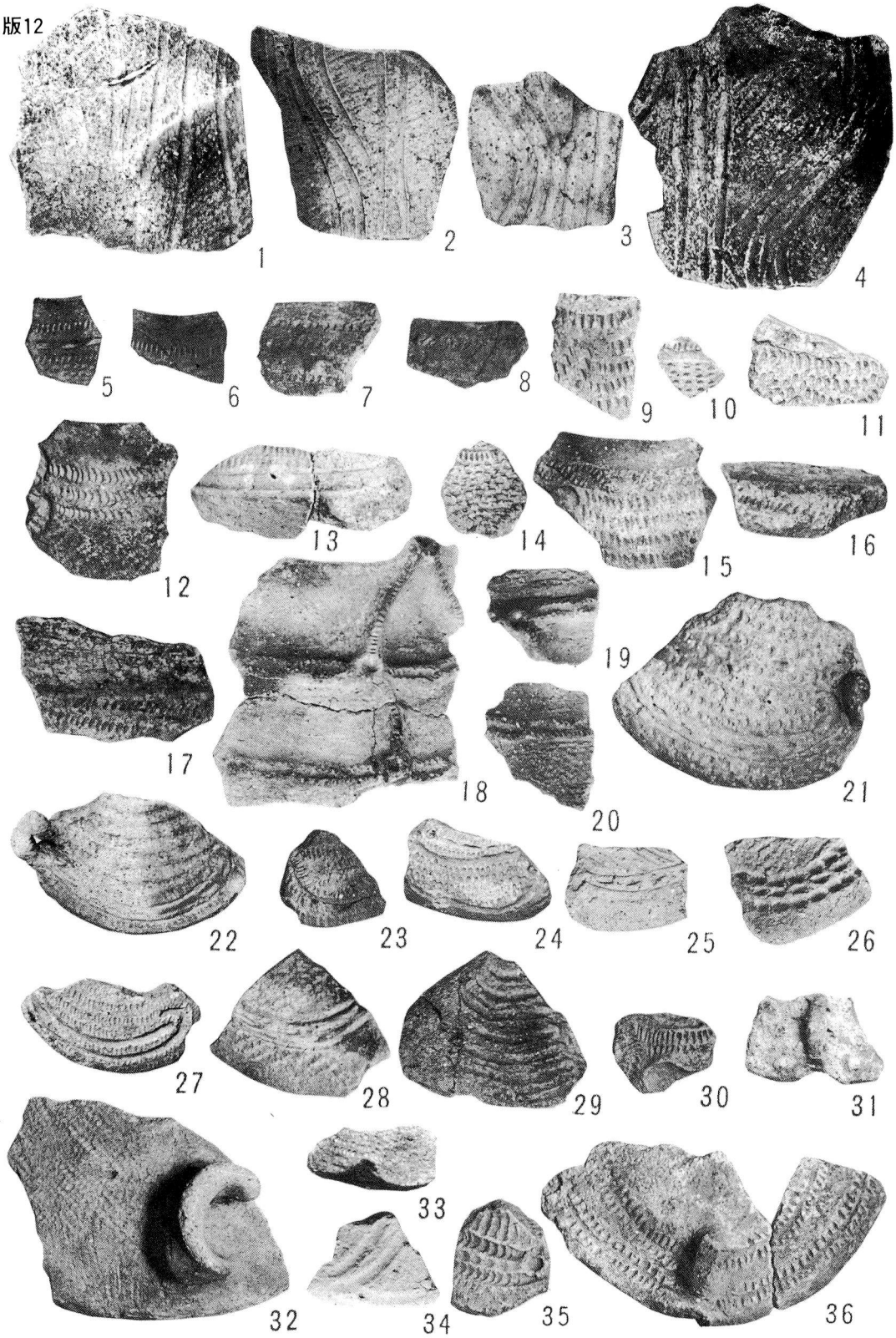


後期の土器

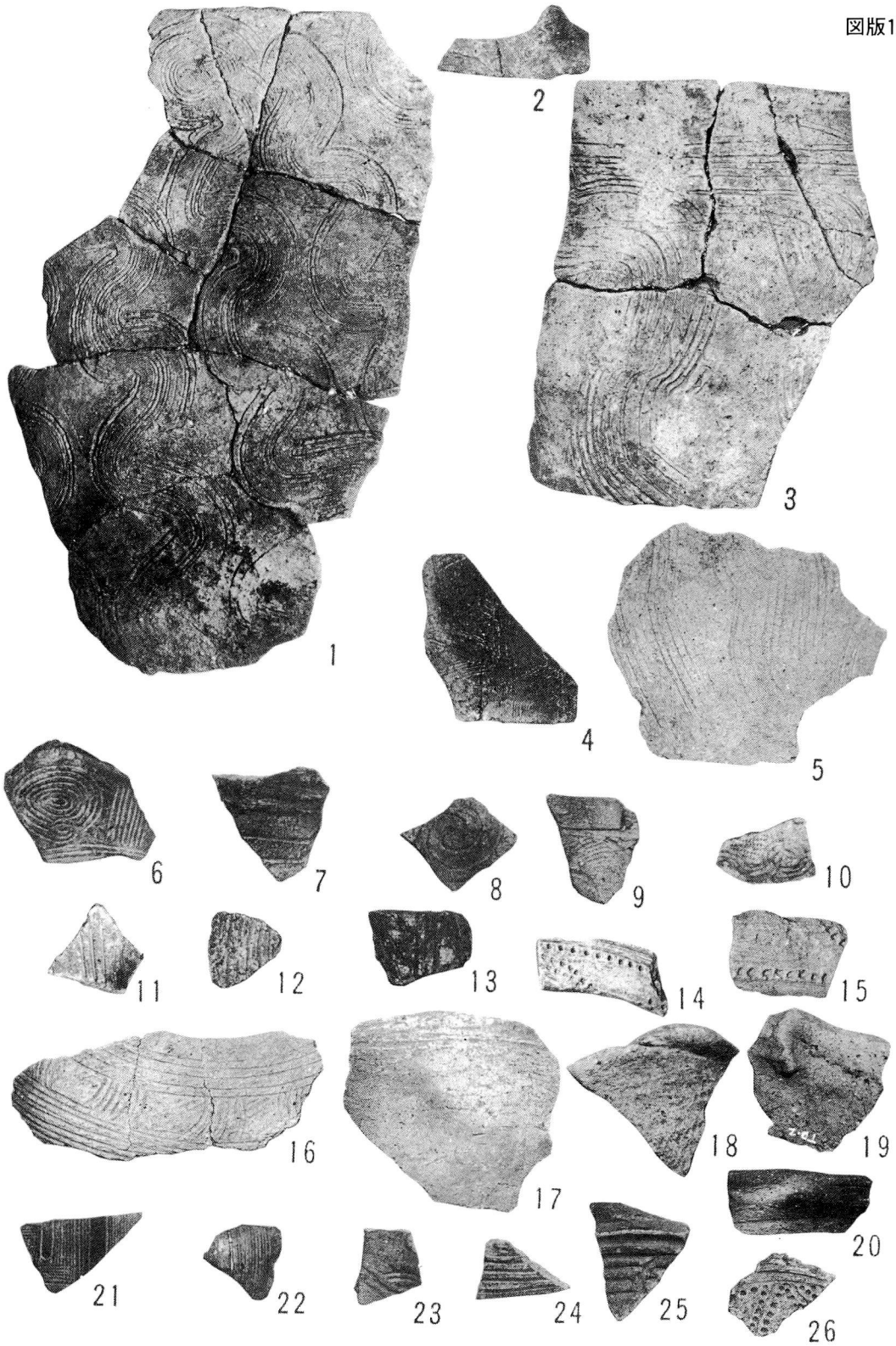


後期の土器

図版12

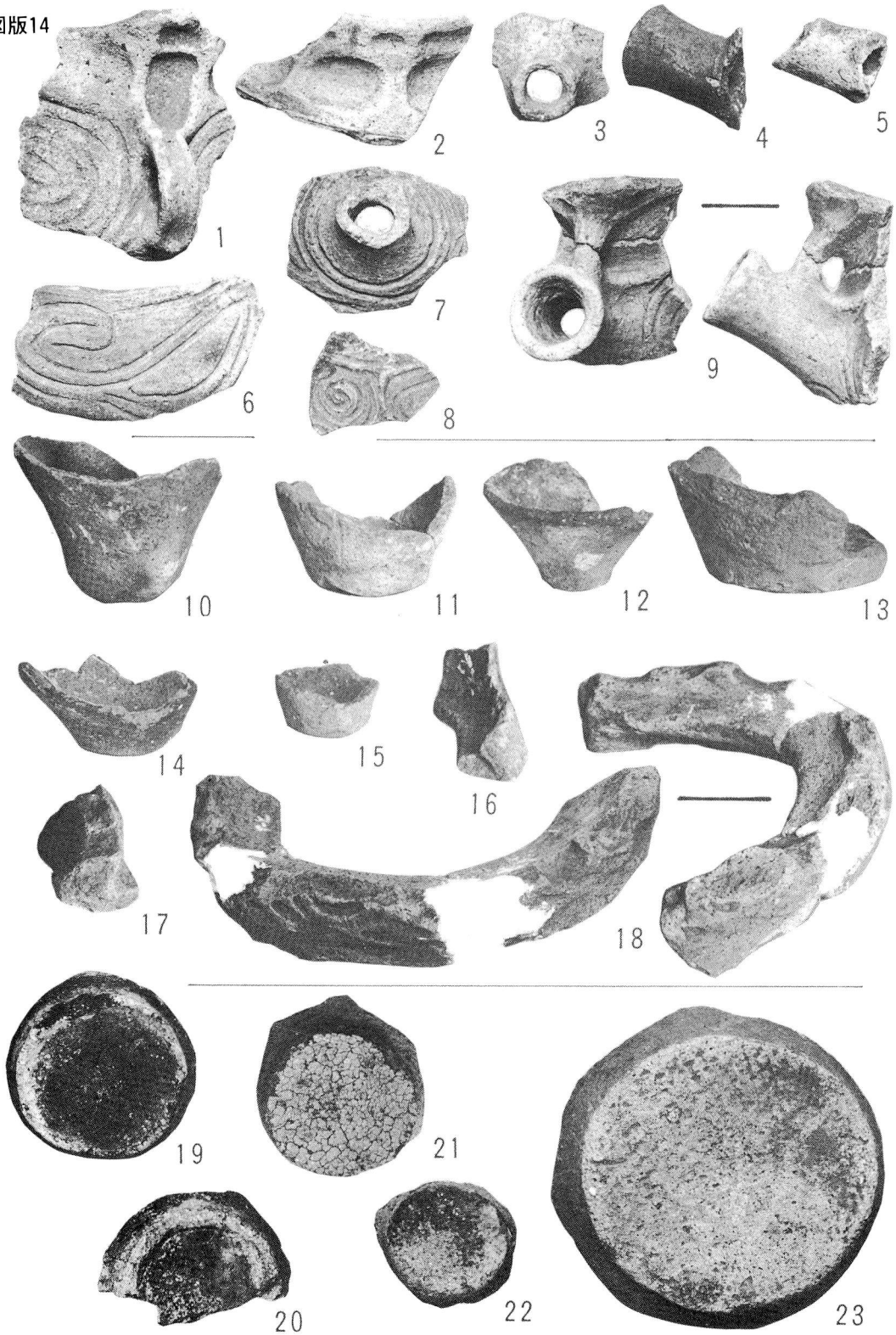

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

後期の土器

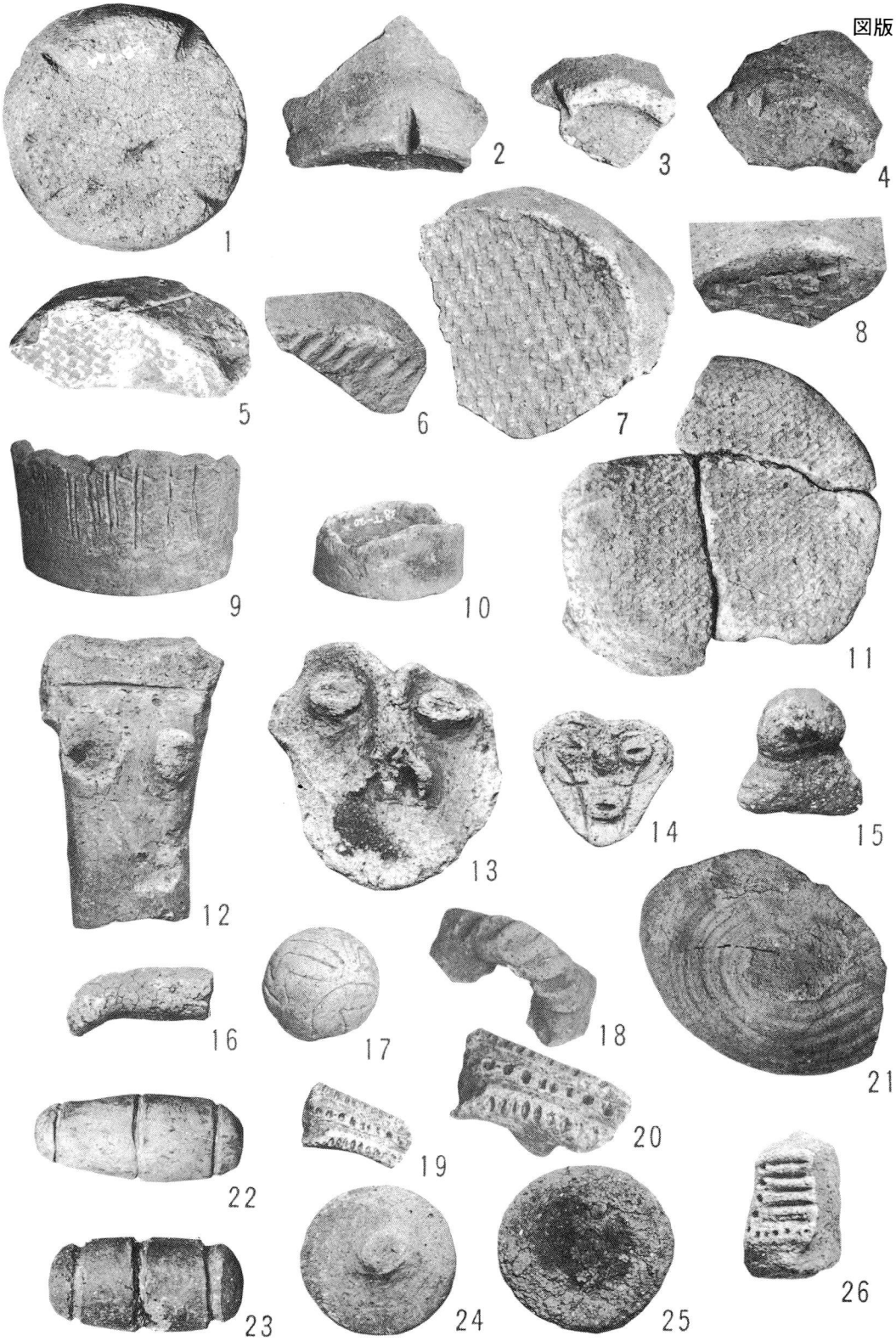


後期の土器

図版14

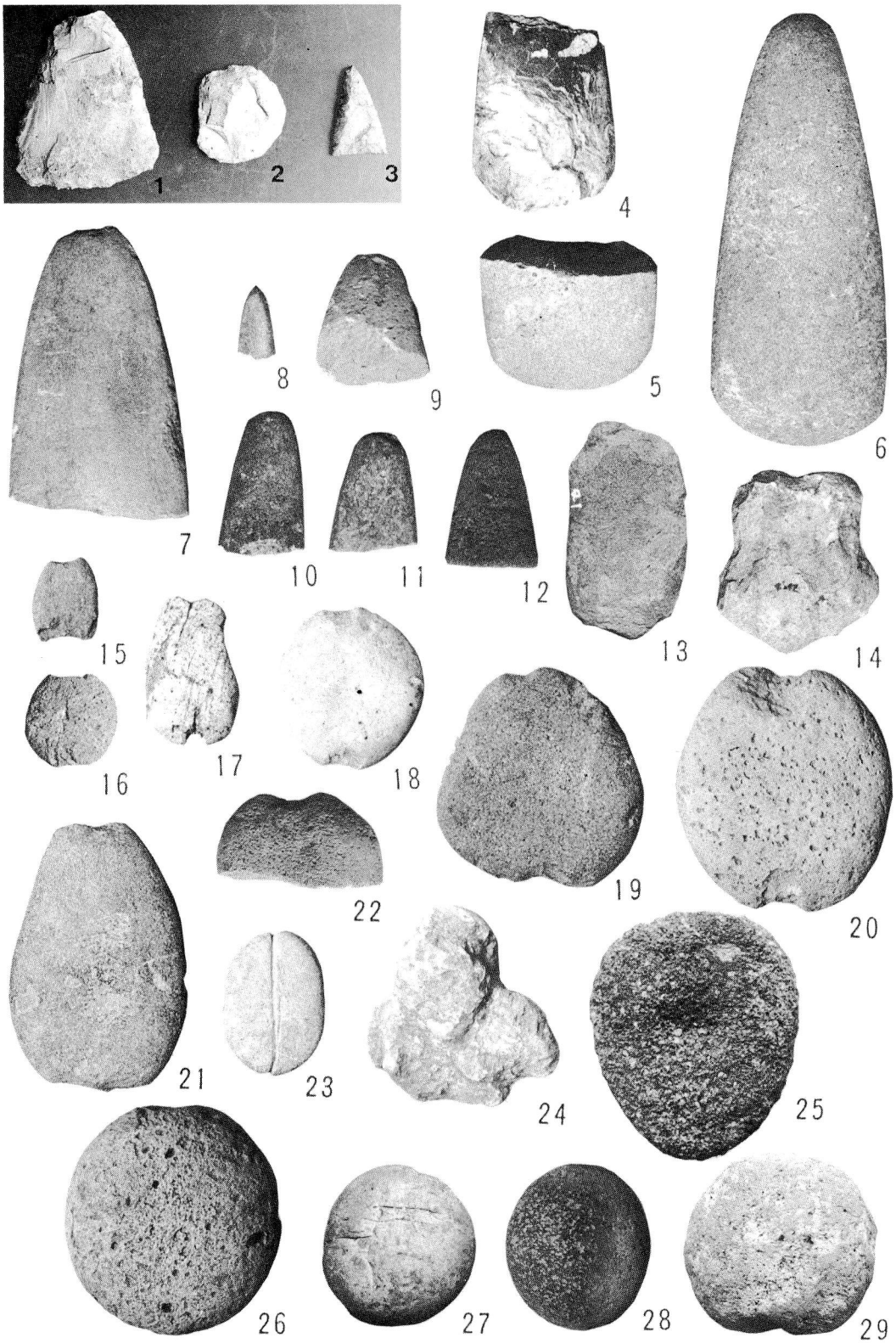


後期の土器・底部

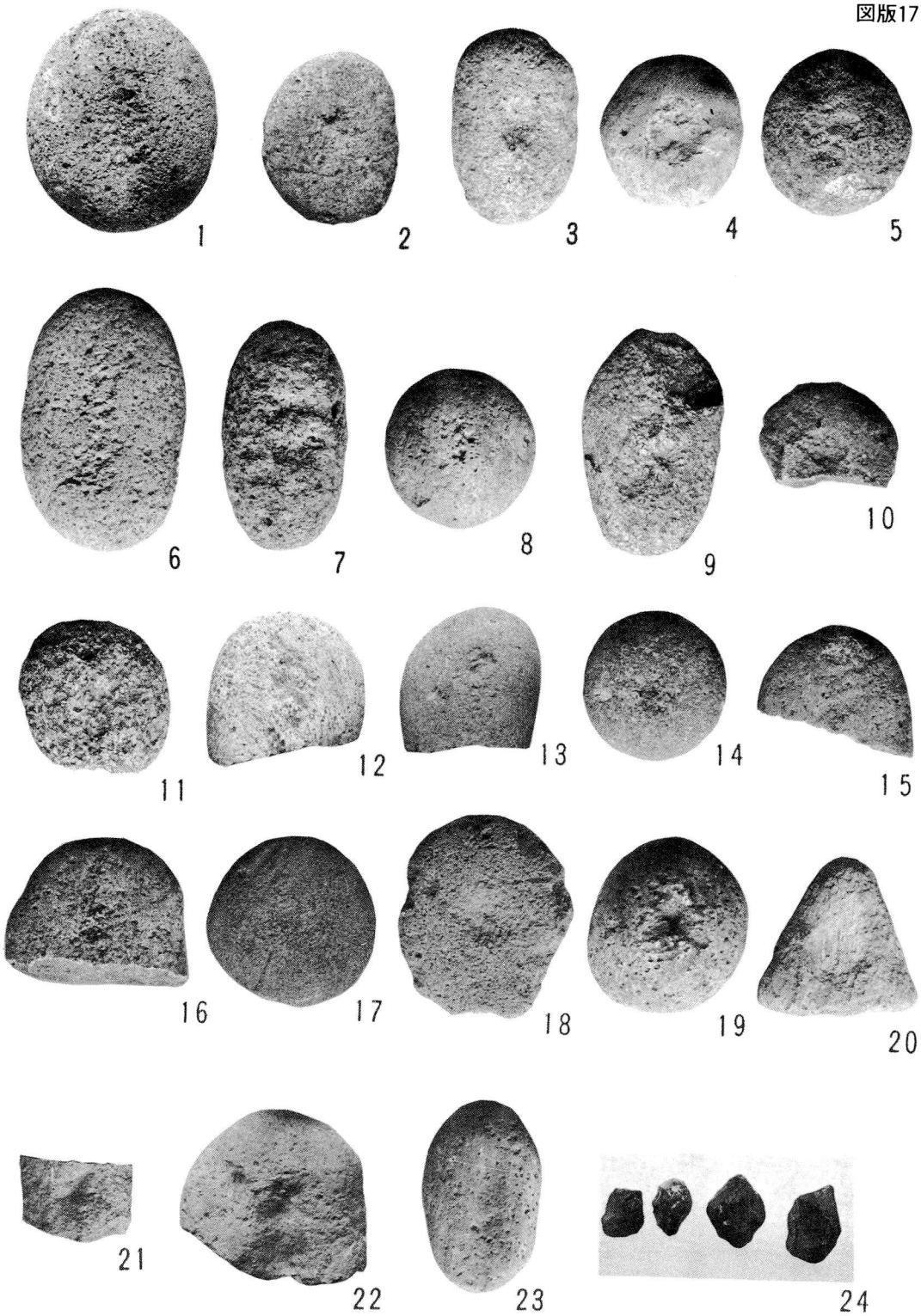


底部・土製品

図版16

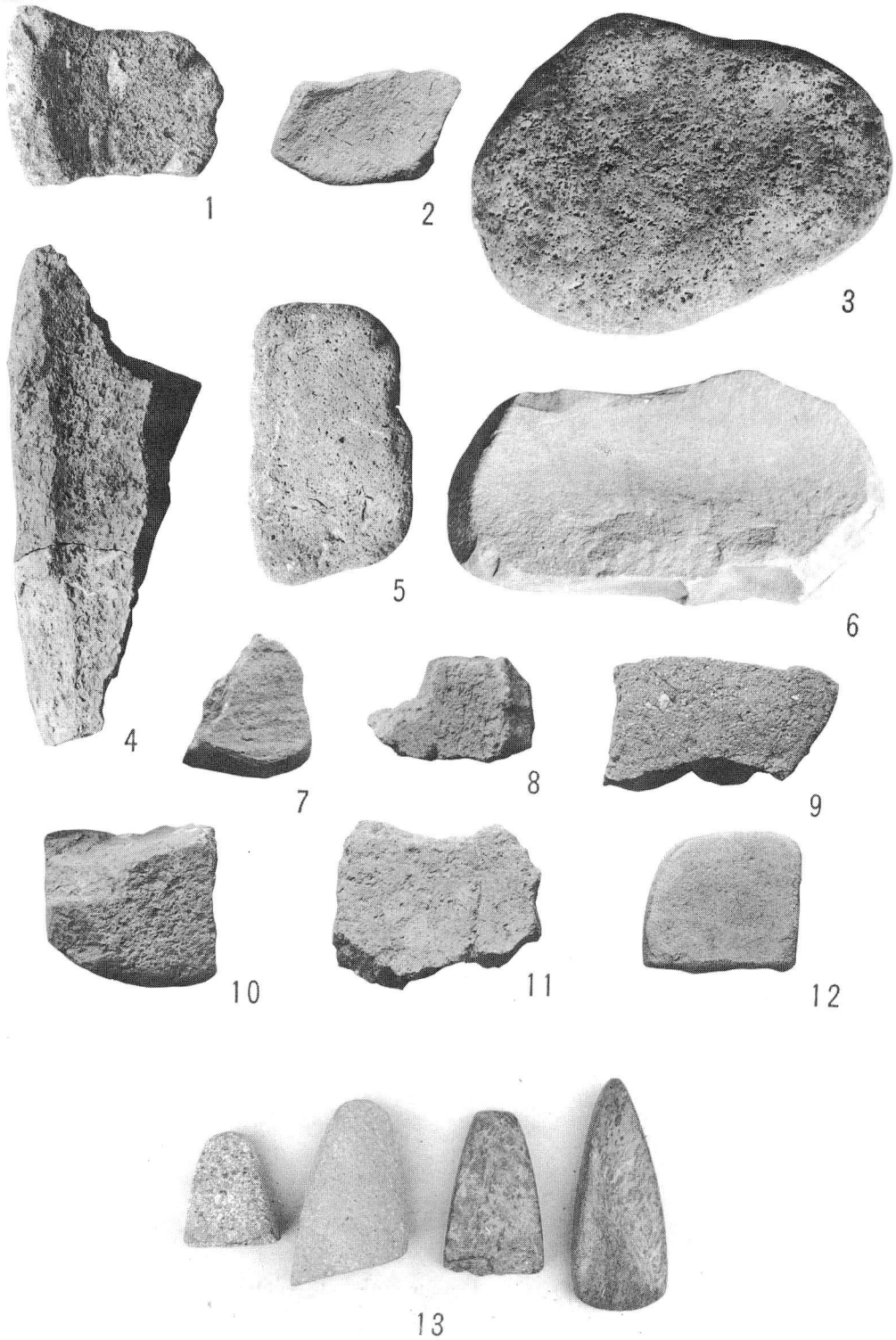


石　器　1



石　器　2

図版18



石　器　3

平遺跡緊急発掘調査報告書

昭和58年3月23日

新津市教育委員会　新津市本町4－18－10
TEL4－5191(代)

新津市図書館　新津市日宝町
TEL2－0097(代)

印刷所　株式会社　北　都
TEL0252-43-8111(代)